U・Iターン者の語りからみる『田舎』と『都会』

半　澤　誠　司(明治学院大学)
原　　祐　二(和歌山大学)　　三　瓶　由　紀(和歌山大学)

Ⅰ　はじめに

これまでの地域イノベーション研究の主流は、「成功」に至る道筋や要素を強調するあまり、創造的なイノベーションには「失敗」が不可避であることを軽視してきた(半澤 2010)。さらに、その失敗を吸収するものとして、イノベーションを生み出す場としての企業や地域などの集団が有する特性とそのネットワークには着目するが(たとえば、サクセニアン 2008・2009)、直接的にイノベーションを創出するわけではない地域が果たす役割を等閑視してきた。

これら２つの視点が主流となってきたがゆえに、有力な産業を持たないことから地域社会の維持には地域外からの多額の税金や補助金を必要とする非効率的な「田舎」が淘汰されるのはやむを得ず、高い競争力を持つ産業が立地するなど活発な経済活動が行われる大都市部にヒト・モノ・カネを集中させることを当然視する風潮が一方ではある。また一方では、ひとびとの就業・生活基盤としての大都市部の限界も指摘される。近年の「地方創生」政策も、衰退する地方の歯止めと大都市部からの脱出に議論の力点が置かれている。つまり、この２つの議論は対極的な要素に焦点を合わせながらも、大都市部と地方とのネットワークが、ある産業全体あるいは国全体のイノベーションの活性化にとって果たしうる役割については、十分に検討がなされていない点では共通する。

しかし、このような役割が重要である可能性は、アニメ産業の事例から示唆される。つまり、現在も引き続き東京大都市部に基盤をおきながらも、産業内の閉塞感を打破して新しい産業の姿、すなわちイノベーションを模索するために、地方への立地が進み始めているのである(Hanzawa 2014)。

確かに、こうした東京大都市部のように発達した産業集積が、新しい環境変化に対応できないがために没落してしまう状況を回避するために、産業集積外とのネットワークを活かして、いわゆる地域的ロックインを回避する重要性も指摘されている(Grabher 1993: Bathelt et al. 2004: Storper and Venables 2004)。ただしそれは、集積間ネットワークの役割を強調する議論であり、集積とは呼べないような地域とのネットワークに着目した議論ではない。したがって、産業集積や産業全体のイノベーション力にとって、地方、特に田舎と呼ばれるような地域とのネットワークが一体どのような役割を担っているのかは、十分に検証がなされていない。

イノベーションを産業集積がいかにして促進するかの議論を脇に置いて、広く田舎・農村の価値を論ずる議論からの視点に目を転ずれば、グリーンツーリズムなどを通じた地域再生が提起されており、農村計画や農業経済学を中心に事例研究もなされてきている。国策としても、

田舎に眠る自然資源を活用する形でのグリーンイノベーションの推進が掲げられ、再生エネルギーに関する技術革新や、都市農村交流を促進する社会制度の構築が叫ばれている。しかしながら、こうした施策は、結局のところ、農村への直接支払と同様に、カネの都市農村間還元フローの円滑化を目指すものであり、事例研究においてもマクロな人口流動や観光客入込数を議論したものが大半である。つまり、田舎の振興の域を出ず、田舎がイノベーションに必要な知識を生み出す源泉になるという視点はないし、大都市部の産業集積や産業全体のイノベーションにとって、田舎が果たしうる積極的な役割を評価するものでもない。

したがって、直接的なイノベーション創出ではなく、他地域や産業全体のイノベーショを活性化する媒介として田舎をどのように評価すべきかという議論には、地域イノベーション研究に新たな視点を導入するだけでなく、今後の地方振興策やイノベーション政策にとって大きな貢献をなしうる視点がある。言い換えれば、都市部で生み出されるイノベーションを一層促進するためには、産業競争力の向上にとって「無駄」ともされてきた田舎がむしろ本源的な役割を果たしうる可能性があるといえよう。

ゆえに、イノベーションの観点から田舎の価値を再評価するためには、非効率性によって生まれる「無駄」がイノベーションに貢献する仕組みの把握から得られる示唆が多いと考えられる。実際、創造産業のように需要の不確実性の高い産業においては、事前に成功する商品などを予測しても限界がある一方で、失敗を恐れ、事前にリスク回避を徹底して効率性を追求するような企業行動が顕著になりすぎると産業の中で創造性が失われていくため、ある程度の失敗を許容するだけの資源を企業内に用意することこそがイノベーションには本質的に重要であり、産業集積はそのような資源を涵養しうる（半澤 2016）。

イノベーションを推進する上では、事前計画の精度を高めて不確実性を減少させても、上述したような根本的な問題点と限界があり、むしろ失敗はある程度織り込むべきとの理解は、生態学や災害研究の文脈から発展してきて、地域経済を把握するためにも用いられるようになった、”Resilience”概念にも共通する問題意識である（Christopherson et al. 2010: Pike et al. 2010）。

ただしこれらの研究は、企業や地域など、いわば個人の集合体に焦点を当てたものであるが、イノベーションは、あくまでも個人行動の結果として達成されるものである。したがって、個人が失敗を過剰に恐れるようになれば、やはりイノベーションは減少していくのではないか、と考えられる。事実、世界で最もイノベーションが活発と考えられるシリコンバレー地域が持つ強みの一つは、挑戦し失敗することを許容どころか推奨する社会的風土にあるとされる（サクセニアン2009）。

ここで留意すべきは、失敗した個人は常に同一の地域に留まるとは限らず、他の地域に移動して再起を図ることが珍しくない事実である。あるいは再起とまではいかなくとも、個人が大胆な行動に移る際の決心が、「失敗したら田舎に帰って農業でもすればよい」と考えていた、などと語られる事実である。これを敷衍すると、イノベーションの中心となる大都市ではなく、田舎といわれる地域もまた、たとえイノベーションが生み出される場ではなかったとしても、イノベーションを推進した個人の挑戦する決心を支える存在といえるのではないか、との仮説が導出できる。したがって、このような田舎が疲弊していけば、「逃げ場」がなくなった個人はリスク回避を優先するようになり、イ

ノベーションもまた起こりにくくなっていくのではないだろうか。言い換えれば、田舎が再起の場として機能しているからこそ、大都市部においてイノベーション活動も活発になる可能性である。

この仮説検証を進めるための第一歩として、本稿では、まずは主に大都市から田舎にU・Iターンをしていった個人を対象に、大都市での「失敗」と「逃げ場」としての田舎という関係が成り立つのかという点に着目して、個人のライフヒストリーなどに基づきながら、その移動理由を詳らかにする。同時に、彼らが他のU・Iターン者や、田舎の意義をどのように見ているのかも明らかにして、今後の調査方針の参考とする。

なお、いわゆる地方においても都市部は存在するため、議論の混乱を避ける目的で、ここからは田舎と対比される地域を「都会」と称する。この用語を用いる理由には、本稿の議論にとって、人口や行政単位の違いに基づいて定義される都市部・非都市部の正確な区分が重要なのではなく、ひとびとが自らの生活・行動圏をどのように認知しているのかが重要であることを強調する意図もある。ただし、基本的に発言をそのまま記載しているインタビュー記録内では、必ずしもこの使い分けが踏襲されているとは限らない。

またⅤ章においては、日本のU・Iターン者の状況を相対化するために、外国におけるU・Iターン的ひとびとと地域との関わり方としてオランダの事例を報告する。

本調査においては、個人の事情にかなり立ち入った情報を聞きとるために、調査対象者との信頼関係を重視して、執筆者達の個人的人脈や既存調査先などを活用して対象者を選定した。結果的に、彼らの属性は多岐に渡るが、都会での生活が「失敗」とはいえずとも都会と田舎で生計を立てる手段が大きく異なっている点、田舎において数年から20年程度の継続的な居住実績がある点は共通する。

なお本稿は、得られた結果に対して厳密な解釈を加えるものではなく、予備調査結果を丁寧に提示する資料として位置づけられる。これに基づく詳しい議論は、さらなる調査を進めた上で稿を改めて行う。ゆえに本稿では、執筆者による考察や議論は付加的に記すに留める。また、Ⅱ章とⅢ章に関しては、補遺として調査対象者の語りを極力そのまま記載する。

Ⅱ　パン作りを核とした和歌山県におけるU・Iターン者

1　調査概要

U・Iターン者が田舎に定住するに当たって重要な検討課題となるのが、いかにして生計を成り立たせるのか、という点である。その手段として最も典型的なのは帰農であるが、近年の興味深い生業として俗に「山のパン屋」と呼ばれる存在がある。その特徴として、経営者にU・Iターン者が多いこと、困難なアクセス性を逆に活用して自然豊かな非日常性を演出していること、地元の食材の活用や農村ランドスケープの再活性化を企図していることなどが挙げられる。

たとえば、和歌山市内から車で１時間程度南東に進むと、遠くに海も望める眺望の尾根線に、ロッジ風デザインのパン屋「D」がある。店主はもともと神戸でベーカリーをしており、その後故郷であるこの紀美野町に帰ってパン屋を開業した。決して交通の便が良いとはいえないが、そのメニューとランドスケープに引き寄せられ、特に休日は多くの客が訪れる。店内にはWi-Fi環境も整備され、ゆっくりくつろぎながら執筆仕事をしている人もいる。紀美野町はこうした山のパン屋、レストランやカフェ、地元

野菜を使ったジェラート屋などが増えており、
全国区で有名になりつつある（写真1～3）[1]。

写真1　パン屋「D」の外観と料理
（原撮影）

写真2　地元野菜を使ったジェラート屋である「キミノーカ」の外観と料理
（原撮影）

写真3「森のパン屋さん」の看板
（原撮影）

図１は、「山のパン屋」の情報をウェブサイトで検索・収集し[(2)]、可能な限り住所を判読して立地空間を特定、Google Mapsを用いて地図化したものである。これによると、全国万遍なくこうした山のパン屋さんが立地していることがみてとれるが、Dも立地する近畿圏を中心に本州中部に特に多い。そこで本稿では、こうした「山のパン屋」が複数存在する和歌山県南部を最初の調査対象地に定め、Iターン者が山のパン屋さんとして活動するとともに、パン作りや就農を志す都会からの移住者の受け入れを行っているNPO法人「共育学舎」において責任者のＳ氏に対して半日程度時間をともにする非構造化インタビュー調査を行った。インタビュー実施者は、執筆者である半澤・原と、原ゼミ関係者４名(院生２名、学部生１名、卒業生１名)である。場所は新宮市(旧熊野川町)であり、調査日時は2015年６月28日である。

共育学舎は「無償の連鎖」をモットーに、廃校と周辺の耕作放棄地など、新築物でない地元にすでにあるものを活用して、自家小麦でのパン製造と、進路に迷った若者の受入れを実践しているNPOである。無理せず今を生きるというそのコンセプトに惹かれ、多くの若者がこの場に逗留し、そして地域内に定着したり都会に戻ったりしている。結果的に地域の人的ネットワークのハブとなっている。

インタビューに際して主眼を置いた問いは、調査対象者の都会・田舎観に加えて、なぜパン屋を経営しているのかという点である。なぜなら、就農を志すU・Iターン者には、稲作に基づくおにぎり屋といった選択もありうるはずだが、なぜ日本ではほとんど作付けされていない小麦素材のパン屋が多いのだろうか。この問いは、彼らが田舎に求めているものを明らかにする上でも貴重な知見をもたらすだろう。

２　調査結果

（１）調査結果概要

Ｓ氏のインタビューをまとめると、本稿の研

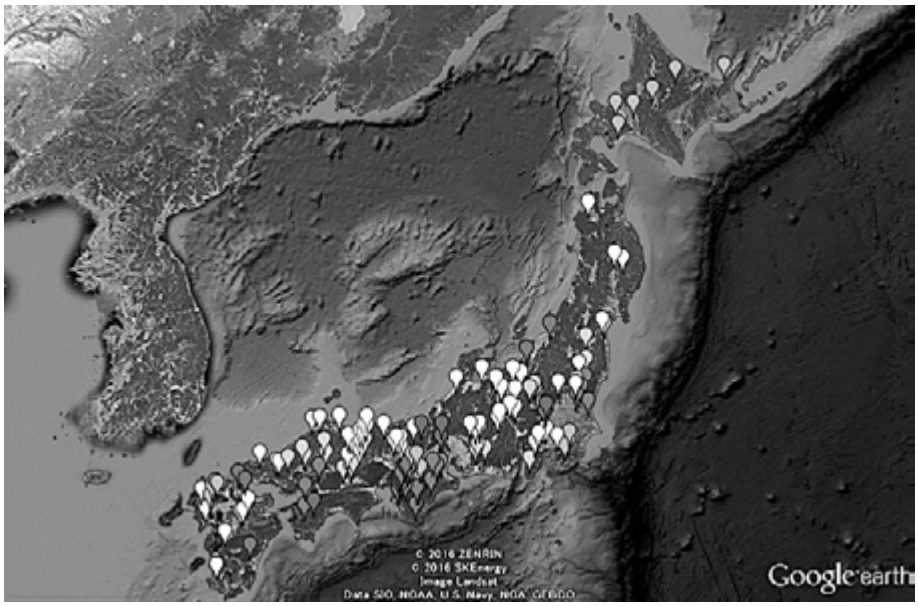

図1　全国山のパン屋地図
(指導院生の協力を得て原作成)

究関心に関連する、Ｓ氏の考えや認識については、大きく以下の７点にまとめられる。

第１に、山のパン屋事業と関係する小麦栽培自体について、日本の土壌・気候条件的に問題なく実施できるが、歴史的・社会的に栽培しづらい状況が形成されてきた。第２に、稲作文化によって形成されたような日本人の横並び気質に対して疑問を抱いており、もう少し多様な生き方が可能な社会を望ましいと考えている。第３に、生業としての山のパン屋事業について、山に立地するというブランド化を利用しているだけであって、自家栽培の小麦や本来のパン作りを行っているものではない。第４に、都会で生きづらくなったひとに対して、田舎で再起を図る場として、学校と農地を結び付けた共育学舎を運営している。第５に、第３世代目に当たる現在のU・Iターン者達は、地域に馴染むことを基本的に考慮しておらず、自分達の世界をしっかり持っているが、一方で自ら多様な生業を見付けて地域に溶け込んでもいる。第６に、中途半端な地域おこしの政策や制度によって、都会の論理が田舎に入り込んでしまい、田舎がこれから荒れる可能性がある。第７に、田舎にだけ閉じこもっていても地域の論理に取り込まれてしまい良い結果を生まないとして、東京や社会全体の論理も意識できるように、定期的な上京を行っている。

それぞれの点について、Ｓ氏が具体的にどのように述べているか確認しよう。

（２）小麦栽培について

第１点目に関してＳ氏は、まず日本の気候は、むしろ小麦栽培に向いた地域であると述べている（写真４）。

> お米をつくって、その裏作で昔は大体小麦を、大麦と小麦とあるんだけども、必ず生産してたんです。だから食糧自給率はかなり高くなって、１年に２回同じ圃場でお米と麦という主食穀物を２回採れるんですね。
>
> こういう自然条件があるっていうのはほんと限られてる、緯度的に言ったら。日本はちょうどいいところにあるんだけどもつくらない。

写真4　小麦区画写真
（原撮影）

さらに、土壌的にも問題がない上に、稲作に使用する農業機械もほとんど共通のものであるため、小麦栽培には本来何の障害もないという。

> ほとんど今の日本の田んぼは圃場整備されて平らにね、平らにして、水は上から下に全部落ちるようにほとんど整備してあるんですよ。だから排水の問題は、もともと湿田以外だったら小麦をつくるために支障を来たすようなことはないですよ。
>
> 和歌山県でこれだけ雨が多いでしょう、日本で一番雨量が多いんですよね。それでもできるんですよ、田んぼで。だからいろんなことが、妙なことを刷り込まれている。
>
> ただ違うのは稲作は水田だから田植えをするでしょう、だから田植え機。小麦は畑作だから種をまくんですよね、だから種ま

き機。これだけは違うんだけどもあとの刈り取り、それから脱穀、乾燥、まったく同じ機械でできるんですよ。

だからうちなんか麦が終わったから今田んぼやってるんだけど、機械は併用だから、お米用、小麦用ってそろえなくていいんですよ。

しかし、色々妙なことが日本人に刷り込まれていると述べているように、第２次世界大戦後のアメリカの占領政策の影響で、日本では小麦がほとんど栽培されなくなったと、Ｓ氏は捉えている。

だからアメリカの占領政策でいろんな政策があったでしょう。例えば日本人の意識をこういうふうにして変えよう、食生活はこういうふうに変えよう、生活のレベルはこういうふうに変えよう。それで二度と立ち上がれないようにしようといういろんな政策があったことは皆さんも勉強したことあると思うんですけど、その中に食糧戦略っていうのがあって、日本人に小麦を食べさせると。要するにずっと売りつけると。

小麦の次には大豆、次にはオレンジ、次には何って全部戦略があるわけです。その第一弾として主食であるお米をやめさせて小麦を主食にさせるということになるとアメリカから買い続けるでしょう、小麦を。

社会的に奨励されているわけでもないわざわざ小麦を栽培する理由は、第２点目と関係する。まず、稲作の裏作として小麦栽培をすることで、一定の収入が見込める。

でも、自分のところで製粉機を１つ持って粉にする、国産の…。（市場に出さなくていいから）そうしたらキロ500円ぐらいで売れるんですよ、500円～800円で。さらにそれにちょっと手を加えてパンにする。そうしたらキロ2,000円にはなるんですよ。そうすると一反分で大体300キロは採れるんですよ、無農薬で無化学肥料で、素人がやっても大体300キロぐらいの収量はある。そうするとキロ2,000円になるんなら60万でしょう？　ざっと。そうすると二反分やると大体100万ぐらいになるんですよ、こんなパン屋をやると。二反分やって100万円になると１つの生活の１本の柱が立つんですよ。大黒柱までいかないけど茶柱ぐらいは。

さらに、周辺の田にまで気を配らねばならない稲作文化が日本人の横並び気質の形成に繋がったと捉えており、田と異なり周りから独立しているために周りと歩調を合わせる必要がない畑で小麦も栽培することで、日本人の生き方も変わると考えている。

畑っていうのは独立してるから、じゃあ今日俺１列だけまいておこう。３日ばかりどっか出張行くからまた帰って来てからまこうとかそういうことができるでしょう。田んぼはそうはできない。だから日本人は全部周りに気を遣ってね、人よりも前に出ちゃいけないでしょう。人より遅れちゃいけないでしょう。

（日本は）主語はみんなが主語でしょう。なぜ大学行くの？みんな行ってるもん。なぜ就職するの？みんな就活してるもん。みんななんですよ。っていうことが、ああ、なるほどそういうことなのかなっていうことが百姓やってみると実感的に。それは私

の考えが間違ってるかどうかわからないけども、そんな見当違いじゃないと。そういうようなことも見えてくるんだね。だから小麦やって田んぼもやって、もしできることだったら田んぼと小麦と両方やってみたらその違いがわかるし、それぞれのよさもわかるし大変さもわかるし。

だからこれから日本人は小麦を主食にしたらもうちょっとのんびり生きていけますよ。

（3）山のパン屋事業について

第３点目に関してＳ氏は、山のパン屋が人気になる背景には、客の側にそのようなパン屋にはこだわりがあるのだろうという刷り込みがあるから、材料や製法は町でも売られているようなパンと同じにもかかわらずブランド化すると認識している。

それはそばもパンもそういうこだわりがあるんじゃないですか？妙なこだわりが何となく刷り込まれてるでしょう。だから山の中にあるっていうことがわざわざ何かすごいこだわってるんだろうなっていうようなブランドがあるんですよ。だから売ってるのは町で売ってるのと一緒ですよ、売ってるパンは一緒ですよ、ほとんど。

したがって、本物のパンをほとんどの消費者が理解できないため、Ｓ氏が作る本物のパンは一部の消費者にしか受け入れられない。しかし、自らを農家であると自認するＳ氏は、自分が育てた作物に余計な添加物などを付加するのを好まず、自給自足の延長線上のパン作りで良しとしている（写真５）。

写真5　パン焼き写真
（原撮影）

だからうちのパン屋は一番日本で売れないパン屋なんですよ。なぜかというと本物だから。売ろうと思ったら本物つくったら売れませんよ。何でもそうだけど、もどきでいいんですよ。本物だったら売れない。なぜかと言ったら本物食べたことないわけだから。

消費者がまだついてきてないんですよ。ただ、わかる人はわかるんですよ、説明しなくたって、買ってる人が。でもわかる人が、じゃあ何人いるかっていう話ですよね。大体ヤマザキパンとかコンビニのパンがおいしいねってみんな食べてる。

だから売れるパンをつくるのか、自分が食べるパンをつくるのかですよね、出発点が。だから自分は農業者だからパン屋だと

思ってないから、俺は農業やってるんだと思ってるから、自分が食べるパンをつくってるわけですよ、売るためのパンじゃなくてね。だから売るためのパンをつくるんだったら砂糖も使います、バターも使います、卵も使います。添加剤、着色料全部、もうさじでポンポンって入れれば甘くておいしくて香りもよくてできるんですよ。そしたらみんなこの辺のじいちゃん、ばあちゃんもおいしいねって食べるじゃない。それはパン屋さんでしょう。俺はパン屋じゃないから、自分で汗水流して小麦をつくってるんだから。それに添加剤入れたりもったいないじゃないっていう話ですよ。だから売れなくたっていいよ、うちは。俺が食べるわけだから。

（4）共育学舎を始めた経緯と社会認識

第４点目に関してＳ氏は、人間が人間であるために必要な「食べる」と「学ぶ」を象徴する農地と学校を結び付けて、若い人達に何か考えてもらいたいとしている。つまり、農と学を根本軸として、社会への問題意識があることが読み取れる。

だから私が(水害を受けるような)ここでこんなことやってるのは、１つには人間が人間であるためには１つは食べるっていうことでしょう。食べ物は農地からできるでしょう。農地が放棄されてる。もう１つは人間が考える、学ぶっていうことでしょう。考えたり学ぶっていうことは学校がその象徴、ここですよね。学校も放棄されてるでしょう。日本全国。ここがたまたま田んぼが放棄されてる、学校も放棄されてる。放棄されてる学校と農地とを結び付けてっていうか、若い人たちに何か考えてもらいたいなと思って、それでこんなことやってるんだけどね。

こうした社会への問題意識、さらにはそれに対して何かをしようとする意識は、U・Iターンの意義に対する発言の中でより一層鮮明になっており、自らが築こうとしているものを、命があれば生きていけるスラムを作ろうとしていると表現している。そして、そこで再起を図って蘇ったならば、また他の場所に行けば良いとして、地域間移動を柔軟に捉えており、必ずしも田舎への定住にこだわっていない点も特徴である。

質問：現在30代の人間の親世代(団塊の世代から少し若いぐらい)だと、就職や進学などで地方から都会に出ていったとしても、都会で行き詰まりを覚えた時に、最後に逃げたり帰れたりする場所として心の中では故郷があったように思います。けれども、個人的には、東京などの都会出身者だと、そのように地域を移動してIターンのように逃げるには最初にハードルがあって、自然に帰れる場所がない感覚があります。

それを今つくろうとしてるんですよね。ここはそういう機能を果たしてるんですよね、自分の意識の中で。だからスラムをつくろうと思ってるんですよね。要するに命があれば生きて行ける、仕事がなくても。命があって食べるものがあって寝るところがあれば生きて行ける。だから死ぬことはないよ。それでまたよみがえったらまたどっか行ったらいいわけで。

どこの国行ってもスラムって必ずあるんですよね。それはいろんなことはあるけど

も、そこに行けば生きて行けるっていうね、そういう場所を今つくろうと思って。

（5）U・Iターンの意義と課題

第５点目に関してＳ氏は、自身らの世代を第二世代として受け止め、それ以前の世代と、現在のU・Iターン者との間に、世代間格差を感じている。その特徴は、地域との交わり方の相違に顕著に表れており、現在の第三世代は地域にどうやって馴染むかという点に対する意識が薄く、自分は自分と考えているようである。

だから今はそういう意味では第三世代に入ってきてるんですね。最近入って来た人、例えば自分は十数年前に入ってきた。今入って来てる人たちはまた違うよね。

何が一番違うかというと、われわれは15年前後前、一番世代は30年ぐらい前でしょう、で、15年ぐらいして入って来て、何が違うかっていうと、ものの考え方で言えばほんとに自分のことだけを考えていく。われわれの世代はまだちょっと地域のこととか自分がここに住むわけだから周りのこともちょっと意識の中にあったんですよ。地域の人とどうやってなじんだらいいのかなみたいな、そういう苦労がすごくあったんでしょうね。

でも今ポッと来てる人たちは、もう俺たちの世界っていうのを非常に強く持ってる。それは悪いことじゃないと思ってるんだけどね。

したがって、地域のことがどうでもよいというよりは、自分を地域に合わせる感覚ではなく、自分の考えに基づいて地域と向き合っているようである。その結果、共育学舎を経由して地域に入ったA氏は、台風で痛んで取り壊されようとした廃校舎を利用した本屋兼パン屋カフェを運営している（写真６）。また、同じく共育学舎に出入りしていたB氏は、新宮の市議会議員を務めていた。つまり、自分なりの生業を地域で見付けて溶け込んでいる。

学生時代からここに出入りしてて、それで新卒で就職しないでここに来て。それでＢは２年ぐらいプラプラしてたかな。たまたま議員選挙があるからって出て。

Ａはあそこに廃校があるからって出て。そんな感じでね。だから彼らは雇用があったから来たんじゃないんですよね。

写真6　共育学舎を起点に地域に入ったA氏が始めた、廃校利用の本屋も兼ねたパン屋カフェ
（原と半澤撮影）

第６点目に関して、Ａ氏やＢ氏はともかく、第三世代は地域おこし協力隊など様々な行政の

制度的支援があって地域に入ってくるため、個人同士が向き合う形にはならないとS氏は認識している。そして、そうした制度自体は悪くないものの、実際の運用が実態に追いつかないために、田舎の実態を踏まえない都会の論理が田舎に入り込んでしまい、田舎の社会が悪くなる可能性を危惧している。

われわれのときはまだ雇用なんてないわけですよ。だから雇用がないことを前提として、だから自分で何とかせなあかんというそういう意識があったけど、今は行政がいろんな制度が、いろんなものがあるからそれを組み立ててというお金が中心としたものになりつつあるんですよ。だから地方が荒れるっていうのは都会の荒れ方が田舎にただ来て場所が変わるだけで。

質問：これまで地方を見捨てていた政府が、今度は地方を巻き込もうとしているものの、その巻き込みの論理が都会のシステムに地方を組み込もうとするやり方にみえます。

だから恐らくこれからは田舎が荒れてくるよね。荒れ方が変わってくる。今までは人がいないから荒れてたんだけど、でもそれはそのもの自体が荒れてるわけじゃないよね。

質問：立ち枯れに近いですか？

うん。これからは外からの意識が、お金というものが入って来てるから速度が違う、荒れ方が。よくなるのも早いだろうけどよくなることはまずないと思うね、税金を使ってよくなることは。今までの例から言ってね。

それの一番いい例が地域おこし協力隊ですよね。

（こちらにも）入ったけど。だから制度自体はいいんだけども、それをうまく…、それは協力隊に限らずいろんな制度自体は悪くないと思うんですよ。

でもその制度を使う行政の人間、あるいは現場の人間がまったく今までと同じやり方をやってるんですよね。どういうやり方かっていうと必ず中間支援をするんですよ。行政が直接やるケースか中間支援を使うか。そうすると行政は何をしていいかわからないからでたらめなことをしますよね、現場のことがわかんないから。

中間支援は結局自分のこと、利益のためにやるんですよね。現場のためにやりませんよね。中間でそうやって抜いて自分たちが。だからぐじゃぐじゃになる。

第７点目に関してＳ氏は、上記で見たように都会の論理が田舎を荒らす危険性を認識しているが、といって田舎を全面肯定しているのではなく、むしろ田舎に閉じこもって地域の論理に取り込まれる危険性も指摘している。

（執筆者である半澤と共通の知り合いであるＣ氏に対して）何年か、10年か20年たって子育てが終わって、またパッと開いてくれればそれはいいなと思うんだけど、それはなかなか日ごろから鍛えていかないと育たない能力やから。子育てが終わりましたからじゃあ何かやろうかって言ったってそこまでの準備がしてなかったら行けないですよね。してはいるんだろうと思うけど。だからよく言ってたの、E（地域名）に染まったらあかんぞって。

それはＡにも言えることなんですよ。Ｂにも言えることなんですよね。だからここに染まるなよって。こんなつまんないとこ

ろに染まるなよっていつも言ってるんだけどね。

この危険性への対応策として、東京のような他地域に対して意識的に足を運ぶことの大切さをＳ氏は指摘しており、配慮を欠いた都会の論理が田舎を荒らすことには否定的であっても、都会そのものに否定的なわけではない。むしろ、社会全体を常に意識して、バランスの取れた行動を取る必要を強調している。

ミスマッチが起きるんですよね。だからここに根を下ろしていいけども、意識だけはいつも外に、風通しはよくしておけよって言うんですよ。だから自分なんかもそうなんだけど、必ず年に何回かは東京行ったり大阪行ったりして、別に用事があるわけじゃないけどこじつけて行って、やっぱり東京の風に当たってこないと、ここに２年、3年いたらここの常識だけが自分を支配していくんですよね。

ここのことがわかった上で全体のことを意識してバランスを取っていかないと。ただ、俺はこう思うんや、だからいいんやっていう非常に狭いものに。いつの間にか隣のことは知らんぞみたいな我田引水になってくるわね。で、地域のことも知らん、俺はもうこれでやっていくんだからって。

何ができるわけじゃないけど意識だけは持っておかないといざというときにポッと動けない。

３　今後の調査への展望

以上の７点が一般化可能なものであるかどうかは、さらなる調査が必要である。しかし、本稿冒頭で述べた仮説である、田舎が逃げ場となる可能性については、まさにそれを目指した活動を行っている人物が存在することは確認できた。また、そのような活動の根底にある動機は、日本人の生き方の多様化を推進したいとの考えである。イノベーションを推進する原動力の一つは多様性であるため、多様な生き方が広まれば、ひとびとが様々な挑戦を行う可能性もまた増大すると考えられる。それゆえ、本研究の仮説検証をさらに進めるためには、共育学舎に来たり、そこから都会に帰ったりしたひとびとがどのようなライフヒストリーを持つのかを知る必要があるだろう。

ただし、われわれが共育学舎を訪問した時に在籍していたひとびとからは、あまり自らについて語りたがらない印象を受けた。それは、都会で疲れ果てた結果かも知れず、彼らとの信頼関係を築いて話をしてもらえるようになることは、今後の重要な課題である。

Ⅲ　グリーンツーリズムとU・Iターン者

１　調査概要

さて、こうした田舎暮らし、地域おこしの文脈で強調されるのが、地元では日常的すぎて気づかれにくい地域固有の自然環境資源を活用した、いわゆるグリーンツーリズムの意義である。そこで、上述してきた新宮市の事例地からも南西に程近い日本屈指の清流である古座川流域地域で、カヌー体験を中心としたグリーンツーリズムを早くから企画してきたUターン者であるＵ氏へのインタビューを行い、グリーンツーリズムとU・Iターン者や都会との関係性を探った（写真７、８）。場所は古座川町で、調査日時は2015年２月14日である。インタビューは和歌山大学の学部教養科目である熊野フィールド演習の一環として、執筆者の一人である原に加えて２名の和歌山大学教員、および当該演習受講学部生10名程度が参加し、１時間半程度非構造化形式にて行った。

なお、インタビュー対象者は、同行教員の長年の知り合いで、和歌山大学が進めている地域再生関連の演習や研究に対して理解を示して協力してくれている方であるため、こうしたインタビューには慣れていることを附記する。

写真7　U氏が先進的にはじめた古座川でのカヌー体験
（原撮影）

写真8　日本屈指の清流、古座川河口付近の漁村景観
注：撮影者はここで清流を撮影中に地元の方に話しかけられ、その美しさを説明したが全く理解されずに怪訝な顔をされた経験がある。景観の美しさや地元の自然資源の価値は、外部者により初めて発見されることが往々にしてある。
（原撮影）

2　調査結果

（1）調査結果概要

Ⅱ章におけるＳ氏の考えや認識とU氏のそれらとの共通点と相違点を中心にU氏のインタビューをまとめると、以下の５点が興味深い。

第１に、U氏自身が抱えた課題が原因ではないが、子息の病気を機に生きづらくなった都会からの移動先として田舎を選択している。第２に、対象者はU・Iターン者に限っていないが、生きづらくなった人が再起を図る場としての古座川アドベンチャークラブ、という認識を明確に持っている。第３に、東京での仕事を通じるなどして他地域の人脈を広げて、古座川とは違う世界を見ることの重要性を認識している。第４に、地域おこしなどに利用する助成金の獲得には積極的である。第５に、自らの活動に対して社会貢献であると同時に経済活動の一環としての意識が強い。

それぞれの点について、U氏が具体的にどのように述べているか確認しよう。

（2）カヌー体験事業を始める経緯と初期の周囲の態度

第１点目に関してU氏は、自身が何かの課題を抱えたり、内発的な動機があったりする形ではなく、子息の病気をきっかけに生まれ故郷に戻っている。しかし、戻った結果、初めて故郷の魅力を発見している。

> それで自分もやっぱり古座川を出てサラリーマンを35歳までやってて、子どものことでこっちに帰って来ることになったんやけど、それは漏斗胸といってちょっと気管が細い、生まれ持って。だから無呼吸症候群だったりとかっていう、そういうような危険性があるということで和歌山市内だったり大阪でサラリーマンの仕事をしてたんだけどこっちに帰って来ることになって、いざ子どもを田舎で育ててっていうことになって、やっと古座川はいいとこやなとすごく思って。

帰郷はしたものの、生計を立てるためにアルバイトなど色々な仕事を経験したが、最終的に、子息を無事に社会人にすることが大切と考え、仕事を横に置いてでも彼を自然の中に連れ出す中で、自分も共に成長できる選択としてカヌー体験事業を思いついた。

その中で子どもの成長だったり自分の成長だったりっていうのを何かしら残せないかなっていうことで、カヌーなら人よりはちょっぴりだけできたので、これをちょっと商売にしてみようと。

第２点目に関してＵ氏は、はじめは明確な経済活動としての観光事業とカヌー体験事業を捉えていたが、古座川が有する地域資源の豊かさを再認識し、それを教育や人作りの形で活かそうと思うようになった。それゆえ、彼と関わった人が気力を取り戻して再挑戦するようなきっかけになって欲しいからこそ、カヌー体験事業の名前が古座川アドベンチャークラブなのである、とまで述べている。

（Ｕ氏以前にこれといった観光事業がなかったため）それで（ガイド論を）勉強していた中で、古座川ってやっぱりすごい資源がある。だからその資源っていうのは教育の根っこになる、人づくりの根っこになる観光事業だろうというふうに思って今その形をやっています。

だからちょっとチャラついた古座川アドベンチャークラブということなんですけど、要は古座川でひとりひとり僕とかかわった人がひとりひとり自分の人生なりちょっと萎えかけた気持ちだったりっていうところに再チャレンジをしていくための１つのワンステップをやってもらいたい、一緒にやりたいというので古座川アドベンチャークラブっていう、だからこの事業自身も古座川ではアドベンチャーなんですよ、チャレンジャーなんです。だから何もないところで。だから非常に非難されました。で、馬鹿にもされました。

非難されたし馬鹿にもされたというカヌー体験事業については、以下のような具体例を挙げて、地元からの目や親との衝突について述べている。

（地元スーパーの）オークワで買い物をしたときに、向こうのレジで精算してる人が大きな声で「あー、お前また遊んどんのんか、俺は仕事しとんのによー」とかね。「ええのー、川で遊んで」って。

カヌーとかいうのはここの辺の人にとっては遊びなんですよ、川遊び。だから仕事としては見てくれてない。っていうのがちょっとやっぱりしんどかったな。

子どもは今でも言いますけど、保育園、小学校へ行くと、最初のうちはやっぱり小学校のうち最初のうちはお父さん仕事何やってるの？　お父さん何やってるの？毎日聞かれたんですね。

だから始めた当時はボロクソ言われて、正月とかお盆に実家に帰るんですけど、ここから父親の所にね、帰るんやけど、家の中に入れてもらえなくて、俺。で、嫁と子どもは家の中で寝させてもらえるんやけど、俺だけテント張って。

結構広い、地主っていうか土地持ちなんで。そこに端っこのほうにポンとテント張って、そこでいる間生活するんですよ。

現在は地元にも親にも受け入れられているU氏であるが、こうなった一因としてスタッフは、カヌー体験事業を始めた約20年前では、全国的にも先進的な試みであり、まして古座川においては全く理解されなかったと指摘する。

スタッフ：彼は、僕客観的に言うたら10年、20年早いことやっとるからね。多分彼が始めたときっていうのは全国的にははしりなんやろうけども、古座川ではまず20年先や。だから今時代がひっついた(追いついた)という。

（3）他地域との繋がり

一般論としても、また第Ⅱ章でS氏が指摘していたように、ある地域内のしがらみなどに捕らわれてしまうことはよくあることである。それゆえ、地域内で新しい試みを行う際には、地域外部からの人材やネットワークが大切になる。古座川アドベンチャークラブ開始当初は地域内からの強い風当たりに直面していたU氏も、明確に外部からの繋がりに救われたとは言っていないが、それが自分のものの見方を広げたとは述べている。これが、第３点目である。

ありがたいことに田舎にいてて東京で仕事して田舎に帰って来て閑散期、するんで結構やっぱりずるずるべったりここにいると自分も刺激がない。行って帰って来ると違うものが見えたり。

東京にいてて仕事をしてるとまたこっちの違う面を思い出したりとか感じたりとか。それは非常に有効でしたね。

だからいろんな世界を35を過ぎてから見てきたんでラッキーでしたね。人の出会いっていうのは大きいですよ。

（4）助成金への認識

第４点目に関してU氏は、S氏と明確に異なり、助成金、つまり公的補助を積極的に取ろうとしている[(3)]。

だからやりたいことがあったらばやっぱりやる。やりたいことのために何をやるか。何をやるかを項目立てて、まずはスタートはお金。そうしたら助成金を取る。助成金を取るにはどんなところがあるか。それを調べてみようや。その中で助成金をもらいやすいところを整理して、そこは何を狙っているのか、待っているのかっていうのをまたやって、そこに向けて自分たちの巨大なテーマの１つを企画として書き込む。それで取っていくというふうにしてやってます。

（5）自らの事業への認識

第５点目に関してもU氏は、S氏と異なる考え方をしている。S氏は、利益を上げることに対して積極的ではなく、むしろ本物のパン作りを志向するなど、自らの理想に重きを置いた行動を取っている。U氏も、第１点目や第２点目でみたように、自らの活動基盤であるカヌー体験事業を、ただの経済活動と考えてはいない。しかし、それを初めは純粋な経済活動である観光と捉えていた上に、現在でもそのブランド構築をよく考えて戦略的行動している。

グッチってそんな大きな工場持ってるの？っていったらそうじゃないよね？家内事業みたいな。でも世界で、すごい離れた日本でもグッチって、グッチ裕三(笑)。だからそれがブランドなんやけど。

で、俺が考えたのは、コマーシャルしない、広告しない、宣伝をしない、なるべく

自分の地域では。

（中略）

スタッフ：宣伝しないのがブランド化の１つね。

そうですね。

高級ブランドの戦略を参考にして、意図的に露出を抑えることで、自らの事業の価値を高めようとしているのである。このように経済的側面も意識しているのは、彼が１人で行っている事業ではない以上、スタッフの給料なども考えると、より現実的な事業継続も意識せざるを得ないためと考えられる。実際、それを意識しているような発言を彼はしているが、同時にスタッフのことも考えて、露出を増やすことも検討していると述べており、ブランドについても、ある種の理想があるというよりは、経済面からみた事業バランスを念頭に置いていることを伺わせる。

だから今半ばうちのスタッフがいるのに何でもかんでも僕が背負い過ぎてるんで、仕事を分散してせなんだらだめですって言われるんやけど、だいぶ育ってきてくれたんで、スタッフが。だから多人数を受けることもできるし、今度はそのスタッフを食わしていかなあかんので、ちょっと広報もしていこうかなと思いますけど、戦略としては今はそういうふうにしてやってます。

３　今後の調査への展望

以上の５点について、改めてU氏とS氏の認識や考え方を比較して、今後の調査のために留意すべき点を確認しよう。

第１から第３の点については、S氏とU氏にほぼ共通する認識であるため、U・Iターン者を受け入れる田舎が社会的にどのような意味を持つのかと、そういったひとびとが田舎で活動する際に何が必要であるかを、示唆しているように思われる。ゆえに、Ⅰ章で検討した仮説には一定の妥当性があると考えられ、この側面についての一層の調査が求められる。

第４と第５の点については、S氏とU氏では大きく考えが異なる側面である。これは、S氏の活動基盤が農業にあり、U氏のはグリーンツーリズムにある点に起因する相違かも知れない。今後の調査では、活動基盤の相違が、各U・Iターン者の考え方にどのような影響を与えるかも見ていく必要があるだろう。

Ⅳ　若年U・Iターン者の認識

１　調査概要

Ⅱ章とⅢ章の調査対象者は、田舎に移住して既に十数年以上が経過し、本人達も50～60代である。それゆえ、様々な経験も積んでおり、考え方や認識も年月を経て変遷した上で、現在のようなものになっているとみなせる。彼らの目を通した形で、若年U・Iターン者がどのような考えを持っているかは既に語られているが、若年U・Iターン者自身がどのような認識や考えを持っているかは確認できていない。そこで、対馬に移住した人物３名へのインタビューを実施した。インタビュー実施者は、執筆者である半澤と原である。場所は対馬市であり、後述する特定非営利活動（NPO）法人の事務所と、食堂で昼食を取りながらの約２時間20分の非構造的で断続的なインタビューとなった。調査日時は、2015年12月５日である。なお、これまでの章と異なり、インタビュー形式の制約から、詳細なインタビュー記録を開示する形とはなっておらず、筆者達の問題意識に対する彼らの回答を記述する形となる。

今回のインタビュー対象者は、地元の伝統的な食材の掘りおこしと農家との連携・商品化に

よる地域振興を目的とするNPO法人Ｔの責任者SZ氏、その職員SK氏、地元メディア企業に勤めるH氏である。後述するように、前２者がＩターン者であり、H氏は別の地域からの赴任である。したがって、今回の調査趣旨からすると、H氏は調査対象外であるが、結果的にSZ氏やH氏と同時インタビューになったこと、田舎への移住者として田舎をどう見ているかという点において参考になると考えられたことから、インタビュー記録を記載する。

２　調査結果

まず、当該NPO法人Ｔは、首都圏からの移住者と地元の若者が、対馬の地域振興を目的にして2012年に結成した。この初期からの参加者がSZ氏であり、SK氏は結成後に職員として採用された。NPO法人ＴがCMを流した地元ケーブルテレビ局でH氏は働いている。

元々SZ氏は30代で、東京の大学院で生化学系の博士号を取得後に九州の製薬会社で働いていた。企業での仕事も楽しかったが、インドアなサプリメント開発業務にどこか物足りなく、自分がいるだけで助かると思ってもらえる地域に行きたいと思っていた。さらに2011年の東日本大震災を経て、何かしなければと思っていたところに対馬市での地域生薬開発のための地域おこし協力隊の案内がメーリングリストで来たため、逡巡はあったが移住を決断した。移住先が対馬市であった理由は、自分の専門性も活かせる可能性があるその案内が同じ九州地方に属する対馬市のものであった以上のものはなく、全くの偶然であった。

SK氏は30代で、東京の企業で物流の仕事をしていたが、福岡市に大きな取引先が出来て転勤してきたところ、対馬市出身の伴侶と出会った。対馬にはほとんど何のイメージも持っていなかったが、定年後には田舎に住みたいという憧れもあったため、伴侶との結婚を機に、仕事がなくとも当たって砕けろと思って対馬に来た。福岡に２～３年いたために、東京と比べた場合のこちらの人の考え方に慣れて、対馬に入りやすくなった感覚はある。実際、対馬には閉鎖的イメージもあるが、福岡市周辺に在住する対馬出身者の集いである「福岡対馬会」などの人的ネットワークによって、対馬に入りやすい面もあるという。

H氏は20代で、長崎市の大学出身であり、同じく長崎市に立地するメディア企業に就職する形で、卒業後すぐにそこが委託事業として受けている対馬市CATVで働くために移住してきた。大学時代に漂着ゴミ回収のボランティアで対馬に来たことはあったが、対馬に来たいという思いはなかったという。ただ、対馬に何かしたいという思いはある。

対馬という田舎に溶け込むことについて、SK氏とH氏は、地元の人は島外の人間を優しく受け入れてくれるとしている。ただ、何かをきっかけに地元の人の中に入っていく必要があるため、大胆に踏み込む必要はあり、引っ込み思案だと、対馬の人が閉鎖的に見えるかもしれないと指摘していた。そういう点で、若い人はスポーツに借り出されるため、SZ氏は弓道、H氏は野球という趣味があるために溶け込みやすかった。逆に、そのような趣味がないと、対馬の生活は辛いだろうという。実際、地域おこし協力隊の参加者でも、任期途中で帰った２人は、趣味がなく宴会も嫌いだったことが影響したようである。

なお都会で上手くいかずに田舎に引っ込むという考え方に対して、SK氏は、逆に決して経済環境が良くはない対馬で上手くいかなかったときに東京に行けば何とかなると思っている面もあると述べていた。なぜなら、元々の仕事であった物流業界は、現在人手不足であるため、

運転手をやれば食いっぱぐれはないとも考えているためである。とはいえ、若い時に都会に出てきらびやかな世界を見ておく方が良いとも思っているという。その方が、年を取ってから落ち着くからである。

３　今後の調査への展望

このように彼らのU・Iターンの理由を見ると、都会での生活に切実な問題があったとはいえず、よりやりたいことが田舎にあったから移住してきたと理解すべきであろう。また、３者ともに地域にどのようにしたら溶け込めるかについては語っているが、第Ⅱ章のＳ氏や第Ⅲ章のＵ氏と異なり、地域の論理に取り込まれ過ぎる弊害や、それへの対応策となる地域外の人脈については特に語っていなかった。これは、移住後の期間の長短から生じているのかも知れない。すなわち、Ｓ氏やＵ氏は地域への溶け込みは完全に完了しているため、次の課題に直面したり乗り越えたりした経験があり、それがよく見えているのに対し、SZ氏、SK氏、Ｈ氏はまだ溶け込み途中であるか、それが完了して日が浅いため、次の段階にまで目が向いていない可能性がある。ただ、特にSZ氏は、NPO法人Ｔの活動で頻繁に東京にも足を延ばしているため、意識せずに外部との繋がりが豊富になっているため、特別な課題と思っていないのかも知れない。あるいは、Ｓ氏がいうような移住第三世代とそれ以前の世代の考え方の違いかも知れない。実際、SK氏の見解にみられるように、田舎で生計を立てることは都会よりも困難な面もあるため、必要があれば再び上京しても良いという考え方は、地域を中心に捉える考え方とは一線を画している。

こういった不確かな面に関しては継続調査が必要であるし、対馬に移住してきて定住した期間がより長い人物への調査も必要である。

Ⅴ　海外事例

１　調査概要

ここまで、和歌山県南部と、対馬を中心に、日本国内の事例について現地調査の予備的な結果を紹介してきた。対馬の事例では、離島における若手のＩターン者の地元食材を活用した地域おこしの可能性も紹介した。

こうした若手Ｕ・Ｉターン者による地元農業の活性化を通じた地域再生への取り組みは、世界各地でみられるが、ヨーロッパの園芸蔬菜農業大国であるオランダの国土辺境の島において、若手農業経営者から直接興味深い話を聞く機会があったので、本章において日本国内の事例との共通点や差異を考察する素材として紹介したい。調査は、2013年11月１日に、本論執筆者の一人である原が学術振興会特定国派遣研究者としてオランダのデルフト工科大学に滞在していた際、所属研究室の定例巡検として訪問した際に実施した。前半は研究室の研究者10名程度でテーブルを囲みながら、後半は農園を視察しながら、１時間程度の非構造化形式で行ったものである。

なお、調査対象者は原が所属していた研究室の構成員からの紹介により選定されたことを附記する。

２　調査結果

調査対象者は、オランダ北部のテッセル島に位置するイチゴ摘み取り農園、Zelfpluktuin Texelの若手経営者である。

テッセル島は、オランダ最大の都市アムステルダムから鉄道で北上すること約１時間でたどり着くオランダ北部の街デン・ヘルダーからフェリーで20分ほど北上した北海に位置する。東西5km、南北20km程度の大きさで、北海の沿岸流により形成された砂質の低平な島である（写真９）。島内は農村景観と自然景観に優れ、

写真9　漁村と平坦な干拓農地から成るオランダ北部の北海に浮かぶテッセル島
（原撮影）

干拓地の自然再生現場も存在し、バードウォッチャーやハイカーが絶えない。島内人口は約１万5,000人だが、夏季には４万5,000人もの観光客が訪れる。しかし他の欧州遠隔地同様に過疎化が進行しており、基幹産業であった農業に加え、ゲストハウス経営などの観光産業も陰りを見せている。そうした中、若手Uターン者による意欲的な農業経営も出てきている。

調査対象者の若者もそのようなUターン者の一人である。世界的にも最高水準の研究教育体制が整うデルフト工科大学にて工業デザインを学んだ後、オーストラリアなどで工業デザイン関係の仕事に勤め、プロダクトデザイナーとしてのスキルや経営能力に磨きをかけた。その後、実家の両親が経営する農園を何とかしたいとの思いからテクセルに帰り、都市での就学・就業時に得た技能も活用した農園の経営を進めている。自然豊かなテクセルで幼少期を過ごした記憶から、オランダ、そして世界を席巻する単一種食料大量生産・長距離流通システムへの疑問を抱き、島民や訪問観光客、そして極論すれば人類全てに新鮮な野菜・果物を提供したいという理念を有している。訪問前夜の嵐により農業設備が大きな被害を受けた状況下での調査であったが、自分達の理念を広めることに熱心であるため、復旧を中断してでも、自分達の取り組みを伝えるために調査者達を快く受け入れ、熱意を込めて理念を説明していた。

Zelfpluktuin Texelは、約20年前に設立された、イチゴを中心とした３haのピックアップ農園で、加工品であるジャムなども販売している（**写真10**）。

夏季にはのべ1,000人程度訪れる人気スポットとなっており、類似の農園が島内で５社存在、61のメンバーが加盟する農業組合があるという。この組合では毎月会合を持ち、最新農法などの発表を学会形式で行うほか、他の先進的なグリーンインフラに関する取り組み地への視察も企画しているという。

当農園では、都会勤務時代の技術と人脈を活用し、2006年からオランダ国内の農業大学であるワーハニンゲン大学と提携し、最新鋭の自律走行型の施肥・照光機器や、効率的なチューブ灌漑施設を発展させ、有機栽培により摘み取り用のイチゴをハウス栽培していた（**写真11**）。

都会勤務時代の技術と人脈を活用し、大学と連携して自律走行機器によるコスト削減試験を行っているなど、最新の工業デザインの知識を活用しつつ、自然観を維持した有機観光農園の経営は、オランダ農業の典型的な先進事例であ

写真10　訪問調査したイチゴ摘み取り農園と若手経営者の様子
（原撮影）

る。とはいえ、やはり保守的な高年齢層の農家も未だに多く、各種の交渉に時間がかかることもあるという。

なお、海外事例については、より調査を進めてからでないと十分な考察ができないため、基本的にはU・Iターン者による活動の一事例の紹介以上のものではないが、都会の経験が田舎の地域社会に変革をもたらしている点は確認できる。

写真11　自律走行機器
（原撮影）

Ⅵ　おわりに

第Ⅰ章で述べたように、本稿は、予備調査結果を提示する資料である。これに基づく詳しい議論には、さらなる調査が求められる。その方向性については日本に関する各章末で検討したが、改めてまとめて本稿の締めくくりとする。

第Ⅱ章では、Ⅰターン者として地域に入り、農業を活動基盤にしてパン屋とNPO法人を運営しているＳ氏へのインタビューから、田舎が逃げ場となる可能性を確認した。

第Ⅲ章では、Ｕターン者として地元に戻り、カヌーを中核に据えたグリーンツーリズムを活動基盤にしているＵ氏へのインタビューから、やはり田舎が逃げ場となる可能性を確認したが、実際に田舎で活動するために必要な資源についての考え方がＳ氏と異なることも判明した。

第Ⅳ章では、地域に入って数年程度の若年Ｉターン者へのインタビューを通じて、田舎を逃げ場というよりは、より積極的な自己実現の場として捉えていることが明らかになった。

第Ⅴ章では、オランダで実家の農場にＵターンしてきた人物へのインタビューから、都会で身に付けた技術を元に、都会との繋がりも活かしながら、田舎で新しい農業を実践していることを確認した。

以上を踏まえて今後の調査方針を述べると、(1)さらなるU・Iターン者への調査が必要であるのが基本であるとともに、(2)U・Iターンを経験しつつまた都会に戻った者、(3)あるいは田舎に戻らずとも都会で挑戦をし続けている者、への調査も必要である。(1)については、本稿のインタビュー対象者達の範疇であるが、活動基盤・世代・田舎在住期間の相違を念頭に置いて、同じ地域で複数の人や、違う地域の同世代や同じような立場にある人たちの認識の比較検討が求められる。(2)については、本当に田舎が再起の場になっているのだとしたら、実際にどのようにして田舎で再起を図れたかを当人から確認する必要があるためである。(3)については、田舎のような逃げ場が挑戦をする人にとって、本当にその決心を促す要因の一つとなっているかを知るために必要であり、イノベーションを起こした人物の自伝などを広く狩猟することが第Ｉ段階になる。

このように調査対象が多岐に渡るために、本稿冒頭で論じた問題意識にすぐに答えられる結論が得られはしないだろうが、引き続き調査を進めて、検証すべき課題に答えていきたい。

〈謝辞〉

自らの内面も含めて率直に語って頂いた上に、インタビュー内容の掲載をご許可頂いた話し手の方々に、深く感謝申し上げます。なお本研究実施に当たっては、明治学院大学社会学部付属研究所・一般研究プロジェクト助成金(平成27年度)『「田舎」が、イノベーションの活発化に果たす役割』(研究代表者：半澤誠司)を使用した。

〈補遺〉

以下が、第Ⅱ章のＳ氏と第Ⅲ章のＵ氏のインタビュー記録である。なお、インタビュー実施者の発言は、趣旨を変更しない形で、適宜省略や要約を行っている。インタビュー対象者の発言については、匿名化処理を除いて、特記しない限り発言をそのまま掲載している。

◆　Ｓ氏へのインタビュー

〈小麦栽培について〉

Ｓ氏：そうすると、どうしても例えば和歌山県の例で言えば、和歌山県内では小麦を栽培している人は数えて何人ですよ。ほんとにおばあちゃんが自分が味噌をつくるから畑の隅にちょっとつくるという人は何人かいるんでしょうけども、ある程度、例えば一反分以上生産している農家っていうのはほとんどいないです。だからデータを調べてもらったらわかるんだけれども、食糧庁のデータの中で和歌山県の小麦生産量はゼロですよ。

うちなんかも生産してるんだけども、１つの自治体で１トンを超えないと、トン単位だから１トンを超えないと１にならないんです。うちなんかは大体700から多くても800ぐらい、だから１にならないんですよ。だから統計上はゼロなんですよ。

(中略)

Ｓ氏：お米をつくって、その裏作で昔は大体小麦を、大麦と小麦とあるんだけども、必ず生産してたんです。だから食糧自給率はかなり高くなって、１年に２回同じ圃場でお米と麦という

主食穀物を２回採れるんですね。

こういう自然条件があるっていうのはほんと限られてる、緯度的に言ったら。日本はちょうどいいところにあるんだけどもつくらない。

質問：採算の問題でそうなっているのでしょうか？

Ｓ氏：一番の原因は日本が戦争に負けたでしょう。それで当時世界大戦だったんでヨーロッパも戦争してた。アメリカは戦争はしてたけども自分の国は安全だった。だから小麦の生産はものすごく上がってたんです。それは全部ヨーロッパに輸出してたんです。ヨーロッパも戦場だからなかなか食糧生産もままならない状況の中で全部ヨーロッパに輸出してたんです。

それで戦争が終わったでしょう。その瞬間にヨーロッパの人たちっていうのは戦争に慣れてるからまず食糧生産にかかりますよね。あっという間に食糧生産にかかったから結局もう輸入に頼らなくてよくなったんです。そうしたらアメリカには莫大な量の小麦が。

Ｓ氏：売り手がなくなって余ってるわけですよ。

Ｓ氏：だからアメリカの占領政策でいろんな政策があったでしょう。例えば日本人の意識をこういうふうにして変えよう、食生活はこういうふうに変えよう、生活のレベルはこういうふうに変えよう。それで二度と立ち上がれないようにしようといういろんな政策があったことは皆さんも勉強したことあると思うんですけど、その中に食糧戦略っていうのがあって、日本人に小麦を食べさせると。要するにずっと売りつけると。

小麦の次には大豆、次にはオレンジ、次には何って全部戦略があるわけです。その第一弾として主食であるお米をやめさせて小麦を主食にさせるということになるとアメリカから買い続けるでしょう、小麦を。

１年目は無償ですよって。日本人は食糧難だったから、まあみんな知らないよね。知らないんだよ。私も昭和22年生まれだから知らないんだけども、でも食糧難だったっていうことは知ってますよね。

Ｓ氏：サツマイモのつるも食べたとか。サツマイモがあったら上等だったとか、そういう状況だったんですよね。

それでアメリカから何年かな？22年か23年か忘れたけども、そのころに無償で提供しますよって、１年目はね。２年目は１割払ってください。３年目は２割払ってください。10年、11年たったら全部有料になったんですよ。

日本人は昔小麦をそんなに食べなかった。食べたんだけど副食的な要素が強かった。そうなると消費量がそんなにのぞめないから、それでパンを食べさせる戦略を立てたんです。

そのときにパッと浮かんだのが学校給食ですから。当時学校で給食が始まったんです。でもお弁当持って来るほど家にはお米がない。ほんとはおにぎりを持たせたいんだけどお米がない。学校でもほんとはお米を食べさせたいんだけどもお米がない。目の前にアメリカから小麦が大量に食糧援助という名の下に送られてきた。

アメリカの戦略としては子どものうちからパンを食べさせれば大人になったら食べる。家庭を持ったら子どもに食べさせるでしょう。

Ｓ氏：（アメリカの戦略に）見事にはまったでしょう。だから米の消費量と小麦の消費量は大体一緒ですよ。パン、麺、菓子。だからその辺の背景が、戦争をやって戦争に負けたがゆえに小麦を日本では生産できなくなってしまった。

Ｓ氏：今度ある程度経済が復興してきたときに日本はものを輸出するようになったでしょう。そうするとこれを買うから、じゃあこれを売ってよっていう話でしょう。アメリカは日本から

の工業製品を買う、その代わり食糧はちゃんと買ってよ、小麦はそのままずっとアメリカだけじゃないから今は中国だったりオーストラリアだったりから小麦を。それは貿易のいろんな駆け引きもあっての話だから単純な話じゃないんだけども、事の発端から言えば戦争に負けたことが大きな日本人の食生活がこれほどまでも変わってしまった。わずか50年ぐらいの間で。そういうことなんです。

歴史を学んでいかないと…。

質問：では小麦はつくろうと思えば自然条件的にはつくれますか？

S氏：つくれる。それは歴史が証明してるからね。現在もつくってここの和歌山県でもできるわけだから。

もう１ついいことは、自然条件が整っていることが１つあるんですよね。もう１つは機械化。今は機械化できないと生産量が上がらないし生産者もやらないでしょう。稲作の機械と。

S氏：麦の機械はまったく一緒なんですよ。

S氏：ただ違うのは稲作は水田だから田植えをするでしょう、だから田植え機。小麦は畑作だから種をまくんですよね、だから種まき機。これだけは違うんだけどもあとの刈り取り、それから脱穀、乾燥、まったく同じ機械でできるんですよ。

だからうちなんか麦が終わったから今田んぼやってるんだけど、機械は併用だから、お米用、小麦用ってそろえなくていいんですよ。

（中略）

S氏：だから日本の食糧自給率を今40％って言われてるでしょう？　あれ80％ぐらいまで伸ばそうと思ったら簡単なんだよね。みんなで小麦つくろうって言って政府が、農協が号令をかけたらまだ今日本の農民はつくれって言ったらつくるでしょう。つくるなって言ったらつくらないでしょう。米をつくれって言ったら米をつくる。米はつくるなって言ったらつくらない。まだ。だから麦をつくれって言ったら麦をつくるんですよ。つくるだけの圃場もある、自然環境もある、機械もある、農業技術もある、全部できるんです。

（中略）

S氏：ほとんど今の日本の田んぼは圃場整備されて平らにね、平らにして、水は上から下に全部落ちるようにほとんど整備してあるんですよ。だから排水の問題は、もともと湿田以外だったら小麦をつくるために支障を来たすようなことはないですよ。

和歌山県でこれだけ雨が多いでしょう、日本で一番雨量が多いんですよね。それでもできるんですよ、田んぼで。だからいろんなことが、妙なことを刷り込まれている。

質問：たとえば、ある集落で有志の人が小麦つくり出したら浮く感じなのでしょうか？

S氏：だから私がここに来て十数年間で小麦をつくりましょうよって、事あるたんびごとにいろんな人に話するんですよ、地元の人に。でも残念ながら今農業やってる人たちは、もう若くて60代ですよ、70、80ですよ。だからはっきり言うと若いころってものを考えて農業やってないですよ。親が米をつくってたから米をつくってる。親がイチゴ農家だったから、金が儲かればイチゴやるっていうレベルですよ。だから話をしてもみんなもそうだけど若いときから考えてないから、年を取ったから頭が固いんじゃないんです、若いときから頭が固いんだよ。だから今さらもう小麦の話をしても何をしても、もう田んぼで米をつくる、それ以外の発想はほとんどないですよね。

質問：小麦を作ることで、採算上不利になることありますか？逆に補助金が出ないから有利な面もありますか？

S氏：そうですね、だから補助金でも今は一反

分当たり小麦つくると３万何ぼか入るんだけど、たとえばこれからの農業を考えたときに、小麦をつくりました、原麦、粒のまま農協に出荷しましたっていったらうちなんかだったら３等級以下だからグルテンの量で言えば、そうすると飼料用ですよ。キロ30円とかそんなレベルですよ。よくても100円ですよ。キロ100円いかないんじゃないですか？

でも、自分のところで製粉機を１つ持って粉にする、国産の…。（市場に出さなくていいから）そうしたらキロ500円ぐらいで売れるんですよ、500円～800円で。さらにそれにちょっと手を加えてパンにする。そうしたらキロ2,000円にはなるんですよ。そうすると一反分で大体300キロは採れるんですよ、無農薬で無化学肥料で、素人がやっても大体300キロぐらいの収量はある。そうするとキロ2,000円になるんなら60万でしょう？ざっと。そうすると二反分やると大体100万ぐらいになるんですよ、こんなパン屋をやると。二反分やって100万円になると１つの生活の１本の柱が立つんですよ。大黒柱までいかないけど茶柱ぐらいは。

質問：稲作の裏でそれだけできたら良いですね。

Ｓ氏：だからお米だと、今直接農協に出荷すると60キロで１万2,000円ぐらいですよね。最高に採れて一反分採れて600キロ採れたらもう最高ですよね。

600キロ採れたとしても60キロで１万2,000円ぐらいだったら10万ちょっとでしょう？苗代、機械代、肥料代、農薬代。そしたらもう合わないですよね。

じゃあこうやって山間地の農家がなぜやってるかっていうと、どっか公務員だとか会社に勤めてるとか土方に行くとか、兼業だから成り立つんですよ。それが山間地の農業を支えてるんだけども、それもだんだん年取ってきたら孫の世代ぐらいは百姓なんてやらんわっていってもうほとんど放置されるでしょう、どんどん。

おかしいと思うでしょう？日本は食糧難ですよ、40％だから。食糧難なんです。で、農地を放棄していってる。自ら。自らですよ、戦争やってるわけじゃないでしょう。農業やろうと思えばできるんですよ、機械もある技術もある圃場もある。全部整ってる。なのにやらない。

何でやらないかっていうと儲からないからでしょう。お金を中心に物事を考えるんですよ。お金があれば生きていけるという錯覚があるんだ。お金がなければ生きていけないという錯覚がある。でも食べ物がないと生きていけないんですよ、実は。お金があってもね。

だから食糧が大事なんだっていうこと、一番大事とは言わないけど大事なことなんだよ、お金も大事だけど食糧も大事なんだよね。そこの価値観が、意識がズレてしまったからね。

小麦の話をしてもこういう話をしても地元の人は何言ってるんだよっていう話なんだ。だからなかなか難しい。

質問：まるで使われない高価な農業機械に補助金が降りてくる状況も何か変ですね。

Ｓ氏：変ですよ、何かじゃなくて大変変ですよ。そうなってくると今度は政治的な問題になってくるんだけども、結局日本の予算の立て方っていうのが全部単年度でしょう。結果払いじゃないんだよね。

わかると思うんだけど企画書に払うわけでしょう。大学でも補助金もらうときそうでしょう？企画書でしょう？

Ｓ氏：これだけのことをやりましたからこれだけの経費がかかりましたから、じゃあこれだけの成果が上がったんだから、だったらこのぐらいの補助金は当然ですよねっていうんじゃないでしょう？

Ｓ氏：紙たった１つ。で、終わったら紙に報告

書書いたらいいんでしょう？写真撮ってもっともらしく報告書書いて。で、数字が合ってればいいんですよ。

S氏：数字が合ってればそれでもうポンで。結果に対して追跡がないんですよ。それは大学だけじゃなくて日本のすべての政策に対して。新宮市でもそう、どっかのNPOでもそう、補助金もらってるところはみんなそうですよ。紙ペラ１枚で。

だから私も補助金もらおうと思ったら、これだけの設備があってやってるから2,000万、3,000万もらうのはそんなに難しくないですね。でもやらない。なぜかというと中毒やからね、あれは。

S氏：それでもたまに申請するんですよ。自分は納税してるんでしょう、直接税、間接税含めたら相当。

S氏：自分が納税した分ぐらいはもらってもいいやろうと。それ以外は中毒になるからやらないけどね。

だからたまに、３年にいっぺんぐらい30万とか50万とかいうレベルでね。そこははっきり分けるんだよね。

小麦っていうか、ぜひいろんな人が、若い人がこうやって関心持ってくれたら少しは日本の農業政策も食糧戦略も変わってくると思う。変わっていかなきゃいけないよ、やっぱりね。条件があるんだもん。砂漠に小麦をつくろうっていう話じゃないですよ。

S氏：(自作の小麦とパン作りを始めようとしている人が、隣の土地に稲作をしている人がいるという話をしたのを踏まえて)ただ、隣で田んぼやってその隣でやるとなると場所によっては、周りの人たち、田んぼやってる人たちっていうのは自分の田んぼのことだけ考えるんですよ。我田引水って言うでしょう？日本人の心っていうのか、根幹にあるのは。稲作文化っていうのは我田引水っていうことですよ。自分の田んぼだけ守ったらいいんですよ。だから隣の田んぼがどんなに日照りになろうと関係ないんですよね。

だから隣で例えば小麦をつくってます。そしたらちょっと気をつけて水が隣に漏れないようにちょっとしてやろうって。ちょっと心遣いがあれば大丈夫なんだけど、それがないから自分はもういい、隣は関係なくもうガンガン水入れる人だと、そうすると水が漏ったりしみたりするケースもあるんですよね。

だから隣の境界線から１メートルぐらいはちょっとビクビクしたりするんだね。そのときはここに溝を掘って自衛策を立てればまあまあ大丈夫でしょう。

小麦と米をつくってみたらすごくいろんなことがわかってくるね。日本人の気質まで。なぜこういう日本人が得意だったのかっていうのが。ヨーロッパの人たちはなんであいう気質なのかっていうこと。全部水田でしょう。こっちは畑でしょう。こっちは日の田でしょう、こっちは水の田でしょう。日と水だよね。

小麦っていうのはマイペースですよ。だって水でつながってないから。田んぼっていうのは水でつながってるでしょう、みんな。だから順番なんですよね。水はもう上から下にしか来ないから、下から上には行かないから順番なんだよね。だから同じ時期にやらなきゃいけないじゃない。水を持ってくるんだから。俺は俺のペースで行かないんですよ、全部順番、横並びできちんとこうやってくるでしょう。

畑っていうのは独立してるから、じゃあ今日俺１列だけまいておこう。３日ばかりどっか出張行くからまた帰って来てからまこうとかそういうことができるでしょう。田んぼはそうはできない。だから日本人は全部周りに気を遣ってね、人よりも前に出ちゃいけないでしょう。人

より遅れちゃいけないでしょう。

Ｓ氏：（日本は）主語はみんなが主語でしょう。なぜ大学行くの？みんな行ってるもん。なぜ就職するの？みんな就活してるもん。みんななんですよ。っていうことが、ああ、なるほどそういうことなのかなっていうことが百姓やってみると実感的に。それは私の考えが間違ってるかどうかわからないけども、そんな見当違いじゃないと。そういうようなことも見えてくるんだね。だから小麦やって田んぼもやって、もしできることだったら田んぼと小麦と両方やってみたらその違いがわかるし、それぞれのよさもわかるし大変さもわかるし。

だからこれから日本人は小麦を主食にしたらもうちょっとのんびり生きていけますよ。

〈山のパン屋事業について〉

質問：なぜ山のパン屋や山のそば屋には客が行くのでしょうか。

Ｓ氏：それはそばもパンもそういうこだわりがあるんじゃないですか？妙なこだわりが何となく刷り込まれてるでしょう。だから山の中にあるっていうことがわざわざ何かすごいこだわってるんだろうなっていうようなブランドがあるんですよ。だから売ってるのは町で売ってるのと一緒ですよ、売ってるパンは一緒ですよ、ほとんど。

和歌山だったら和歌山県で一番大きいパン屋さん、売れてるパン屋は和歌山の紀美野町のＤって知ってますか？

Ｓ氏：あれが一番でしょう、和歌山県で。

Ｓ氏：で、売ってるパンなんて神戸の市内で売ってるパンや。

Ｓ氏：もともと神戸の人やからね。ただ、場所が神戸の市街地から紀美野町の山の中に変わったっていうだけの話で、売ってるパンはね、中身は全部一緒ですよ。

Ｓ氏：山なんだけども、ただ、今は場所が変わっただけなんだよね。材料はまったく一緒なんだよね。全部国産小麦じゃなくて。

Ｓ氏：輸入した小麦で、こういう具材とか、もう全部問屋から仕入れて。だから今流通が、例えば神戸市内でも紀美野町でも電話１本、ネットでパッとやったらもう次の日着くでしょう。山の中だからそれが３倍かかるかっていったらそうじゃないでしょう。

Ｓ氏：時間が３倍かかるかっていったらそうじゃないでしょう。多分ここでも東京には次の日着くんですよ。東京のものが次の日届くんですよ。そうすると材料はほとんど神戸で買うのとここで買うのと同じ値段ですよ、送料も含めてね。こっちは家賃安いですよ。で、同じものをつくったら、いや、おいしいわって食べるわけですよ。

そこがじゃあ何なのかっていう中身を吟味するだけの消費者の意識がまだ育ってないんだろうね。

だからうちのパン屋は一番日本で売れないパン屋なんですよ。なぜかというと本物だから。売ろうと思ったら本物つくったら売れませんよ。何でもそうだけど、もどきでいいんですよ。本物だったら売れない。なぜかと言ったら本物食べたことないわけだから。

Ｓ氏：わからないから、味が。

Ｓ氏：ちょっと変だねって。

Ｓ氏：消費者がまだついてきてないんですよ。ただ、わかる人はわかるんですよ、説明しなくたって、買ってる人が。でもわかる人が、じゃあ何人いるかっていう話ですよね。大体ヤマザキパンとかコンビニのパンがおいしいねってみんな食べてる。その上に町の例えばDとか名前出したらあれだけど、材料は同じだけどちょっとしゃれた、そういうパンがおいしいねってみんな思うだけです。そのさらにほんの何人かが

本物知ってるんですよ。

S氏：(前略)だから売れるパンをつくるのか、自分が食べるパンをつくるのかですよね、出発点が。だから自分は農業者だからパン屋だと思ってないから、俺は農業やってるんだと思ってるから、自分が食べるパンをつくってるわけですよ、売るためのパンじゃなくてね。だから売るためのパンをつくるんだったら砂糖も使います、バターも使います、卵も使います。添加剤、着色料全部、もうさじでポンポンって入れれば甘くておいしくて香りもよくてできるんですよ。そしたらみんなこの辺のじいちゃん、ばあちゃんもおいしいねって食べるじゃない。それはパン屋さんでしょう。俺はパン屋じゃないから、自分で汗水流して小麦をつくってるんだから。それに添加剤入れたりもったいないじゃないっていう話ですよ。だから売れなくたっていいよ、うちは。俺が食べるわけだから。それでここにはいろいろ滞在者がいるからね。売れ残ったら１週間それで自分たちが食べたらいいわけだから。そういう経営哲学がね。だからおっしゃる通り売れないとつぶれるじゃないですか。うちは売れなくてもつぶれないパン屋だからね。だから日本一売れないパン屋だけど何十年ってやってる。今度月１回にする、今まで毎週やってたんだけど今度月１回にしてね。

質問：車で買いに来る客が多いのですか？

S氏：そうですね。だから近場の人はまず来ないですよ。

S氏：じいちゃん、ばあちゃんだって入れ歯だから。

S氏：食べられないですよね。好きな人っていうのはやっぱり車で２時間、さっき山の中でもっていう…、この辺だったら遠くなら串本とか和歌山市とか、そういう人がたまに来るんですよ。

　だから生産量に合わせて加工していくから。だから大体二反ちょっとやってるから大体500～700キロぐらいだけど、そうすると月で大体40キロと計算してるのね。で、１週間に10キロで、そうすると大体年間500キロぐらいでしょう。それでたまにちょっとイベントとかがあるからプラスしていくんだけど。それでほどよい。

　だから生産量を１トンにしたらそういうふうにしていくんだけど、三反分やると、二反分と三反分でまた全然違うしね。

S氏：そうすると自分の生活のリズムが変わってくるじゃない？

質問：10kgの小麦でパンは何個ぐらいつくれる計算ですか？

S氏：大体２万円ぐらいだから、カンパーニュっていうこれぐらいの大型のよく都会なんかでも売ってるじゃないですか。あれがうちが今600円かな？か700円で売ってるんだけど、それが大体30個ぐらいかな。

質問：では、週で大体20～30人買いに来れば消費が追いつくのですね。

S氏：だから１週間に売上げ２万円って計算してるんですよね。そうすると月に８万円でしょう。そうすると年間大体100万円ぐらい。そうするとさっきの計算と合うでしょう。

S氏：大体それぐらいのね、自分の中での計算はそういう計算ですよ。仕入れ代はほとんど起きないからね。入れる何かもうちのカボチャだとかサツマイモだとかジャガイモだとかそのときに採れたものを。レーズンとかそういうのはもちろんあれだけど、でも仕入れが１割から１割５分ぐらいだからね。仕入れ原価がね。そうすると２万円そこそこでもやっていけるでしょうね。仕入れ原価が３割、４割だったらその倍やらなきゃいけないでしょう。

S氏：１週間に４万円ほどと思うと１日２万円は売らなきゃいけないでしょう。つくる量が違ってくるでしょう。

S氏：専業のパン屋だったらもっとできるんだ

よ。でも百姓もやったり。

Ｓ氏：だから週に２万円ぐらいだと気が楽だよね。売れなかったとしても。

Ｓ氏：そうそう、ちゃんとしたものを（農業の方で）つくろうっていう気持ちになるんですよ。

Ｓ氏：お金の計算し始めると、うまーくこうやって･･･。こんなん好きじゃないなあって。もっと朝早くからもっとつくらないかんし、売るためにはね。もっともらしく１年中カボチャパンつくろうとかってなるわけじゃない。そうしたらさじ１本でパッと粉やればカボチャパンやない。

Ｓ氏：自然とそういうふうになってるんですね。だからＤなんか儲かってしょうがないでしょうね。

質問：Ｄのパンの原価はいくらぐらいでしょうか？

Ｓ氏：大体２割、大体３割５分ぐらいが目途なんだけどね。だから３割超えると厳しいけどもね、まあ安い。ある程度、例えば同じバターなんかでもマーガリンじゃなくてバターを使えばおいしいと思うわけだから、ちょっとだけ原価を高くしてやればね。

あと砂糖ね。パン屋やったら砂糖をパッと１つかみ入れたら、ここはおいしいなっていうパンができるんです。

Ｓ氏：見た目がまず違うね、焼き目が。おいしそうにこんがり焼けます。で、食べたときにおいしいって。砂糖をパッと入れたらいい。それ知ってるけど、それをやるともうやり続けないと不安になるでしょう。だからもう最初からやらないですね。やらない。だから１回も砂糖なんか入れない。バターも入れない、卵も使わない、パンはね。そういうふうにやってるから売れない。

〈共育学舎を始めた経緯と社会認識〉

質問：Ｓさんは、元々農業をずっとしていたのですか？

Ｓ氏：いやいや、こっちに来てから。平成11年だからそのころ来て、たまたま農業を始めて、休耕田が多かったから、それで休耕田を何とかしようかなと思って、そしたらいっぺんにできるものっていったら穀物でしょう。で、穀物何本もやったり、で、そばをつくったり、小麦が一番安定してるなと思って、それで小麦をつくって。で、小麦をどうしよう、うどんにしようかパンにしようかって。で、若い人にはパンのほうがいいだろうなっていうんでパンにしたわけです。

だからパン屋がやりたくてパン屋やってるんじゃなくて、畑から出発してる。

質問：元々は会社勤めをされていたのですか？

Ｓ氏：今で言うニートやね。元祖ニートって言ってるんだけども。だから若いときに進学もしなかったし就職もしなくてひきこもってた。18歳で。

Ｓ氏：（出身は）静岡。

Ｓ氏：当時はまだ右肩上がりだったね。中学出て就職する人、高校出て就職、大学出て就職って。で、終身雇用みたいなのが社会の常識だったからみんなが就職して車を買った、カラーテレビも買ったっていう、働いてお金を得て物が入ってくるという実感のある時代だったから、みんな働くことに何の疑問も持たなかったですよ。

だけど自分は何かちょっと違うやろうなと思ってたから。で、進学も就職もしないでひきこもってた。だから最初から今もそうだけど最初にポンとレールに乗るとずっと行けるじゃないですか。最初にプッと踏み外すとなかなかもう行けないですね。

Ｓ氏：最初から外れたからずっと外れっぱなしで、外れ者には外れ者の意地もあるし喜びもある。悲しみもあるけど。

質問：1970年代の初期Uターン者は、左翼運動を経て、現在の社会体制への疑問をもった人々が自分達の理想を実現するために共同体運動として始まっていますね。

S氏：そうだね。だからヒッピー文化っていうのあったのご存知？だから資本主義の１つの流れがあって、それに対して共産主義という大きな枠で言えば２つあって、それのどっちにも属さない、こっちも違うしこっちも違うよなっていうのがヒッピーみたいなのが生まれてきて、で、左翼の運動もかじったけどものめり込めなかった。こっちももちろん行けなかったっていう人たちが、じゃあ農業、有機農業とかね、その頃。それで有機農業とかに関心持った人たちが田舎に入ったっていうケースが結構あったんですよ。で、コミュニティをつくった。沖縄だとか。で、みんな分かれてまたそれぞれに分かれて分かれてっていう流れがありましたけど。

質問：いわゆるU・Iターンブームがあった1970年代から90年代前半よりも一息遅れてUターンをした理由は何ですか?

S氏：そのころは自分はまだどうしていいかわかんなかったからずっと考えてた。この後どうやって生きていこうかっていう。

だから若いころ、20代のころは政治にもすごく関心があったから政治的な活動というか、右か左かっていえば右だったけど、当時は左翼はマルクス読むバカ、読まぬバカというぐらいで若い人は必ずそれに１回は触れて、それにのめり込んでいく人、それからノンポリになる人、ごく一部の右に行く人って分かれてたんだけど、自分はたまたまどっちかと言えば生まれ育った環境もあるし親の影響っていうのもあるんだけども、日本人としての当時は天皇の存在っていうのがどっか頭の中の意識の中にあったんですよね。

小学校のころに学校の授業で日本は戦争に負けてよかったっていうような教えを受けたんですよね。それを家に帰って「戦争に負けてよかったんだ」みたいに子どもだから言うでしょう？

そうしたら自分の親は戦争に行ってた、じいさんももともと軍人だった。それで普段怒らないじいさんがすごく怒ったんですよね。今の学校はそんなことを教えてるのかって言って。そんなことが何となく頭の片隅に残ってたんですね。

それで日本っていうのは歴史をたぐっていくとやっぱり天皇っていう存在を抜きに語れない。いい悪いは別として、好き嫌いは別として、やっぱり天皇という存在がいつも歴史の中にあったという。特に明治以降はつくられた天皇像があって、それの影響もあったから何となく日本という国は天皇を中心として回ってきたんだから、これからも回っていったらいいんじゃないのかななんて若いころはそんなこともふと思ったこともあったよね。

でもそれもやっぱり違うよなと思って。かといってじゃあ金を稼いでみたって金を稼ぐことに自分の中に疑問はあったけどね、それも違うよなっていう。

宗教も多少かじったけどそれも違うよなって。だから20代のころは政治と経済と宗教が社会を動かしてるみたいな、そんな思いもあってこの３つをバランスよく自分も身に付けたらいいのかなって思ってそれぞれかじったけど、結局30ぐらいになったときにどれも合わねえなって、自分には。

それで１回全部やめて、自分一人になってこれからどう生きるのかなっていうことを考えて、30代の終わりぐらいにまあまあこれでいいのかなっていう、ある程度自分の中で何となく思うことがあって、それを確かめるために40代の10年間は誰にも会わない。自分が思ったことが本で読んだことなのか人から教えられたこと

なのか、自分の中から出たことなのかをちょっと確認したくて本も読まない、人にも会わないっていう生活を10年ぐらいして、それからのこのこ世の中に出て来たから。

だからそのころがちょうどもう平成８年、９年、10年ぐらいだったかな？だから遅れてるというか近いものを持ってたから。

Ｓ氏：(年齢は)68です。だから団塊の世代です。

質問：同世代に左翼運動をしていた人も多いですか？

Ｓ氏：いっぱい知り合いなんかも東京にいて、大体真面目で正義感があって真剣に、リーダーシップもあって、それがもうやるんですよ。でもみんなめちゃくちゃになって、そういう人たちがみんな地下にもぐっちゃったのね。

そのあとの人たちが今社会の中枢に10年、15年ぐらい前から社会の中枢になったから、ラベルを偽装したりとか企業のモラルがめちゃくちゃになってきたでしょう。だからあのころのほんとに正義感があって社会的な使命感もあって、世の中をよくしていこう、国をよくしていこう、国民の生活がもっと幸せになるようにしようという人たちがほとんど地下にもぐっちゃったの。リーダーだったから。

質問：彼らが本道に行けなかったと。

Ｓ氏：行けなかったんですね。そういう人たちはまだ今語ってないです、世の中にいて。ただ、戦争に行った人たちがほんとに第一線で戦ってた人たちは戦争のこと語らないじゃないですか。語れないんですよ。いろいろ生々しく思い出しちゃうと。だから今団塊の世代で、自分らの世代でやった連中はお互いどこでどうしてるのか知らないけども、わからないけども、若いころは考え方が違っても思うことは共通の思いがあったからね。それはよく議論してね、ぶつかったりいろいろあったですよ。

質問：学生運動でも本当に前に出ていた人は公安に捕まり、リスク回避をした人が結構政治家になったりしているようですね。

Ｓ氏：それは歴史が繰り返してるよね。だから明治維新なんかでもほんとに命がけで優秀な人たちは途中でみんな抹殺されて伊藤博文だとか山形何とか、当時下っ端の人たちがなったでしょう。

戦争もそうですよね、ずっと戦争やって軍人としても人間として誠実さもあって正義感もあってっていう人たちはみんなその時点でもう…。田中角栄みたいな人が戦後の政治で言えばポッと出てきて、中曽根とかね、そういう人たちが主流になっていったでしょう。今まさにそれを繰り返してますよね。

質問：小学校の廃校であるこの場所をどのようにして見付けたのですか？

Ｓ氏：偶然農業やってて、休耕田がいっぱいあるから休耕田を何とかしようと思っていろんなところを１人で耕してたんですよ。たまたまここも田んぼ耕しに来て、トイレを借りたのがきっかけで、そしたらここに、外から見たらガラス管がこの中にいっぱいあって使ってない状態だったから、それでちょっと話をしてそれで貸してもらうようになったんですよ。

質問：この場所が廃校になったのはいつですか？

Ｓ氏：平成３年です。

質問：その頃には既に物置のようになっていましたか？

Ｓ氏：そうです。行政がもう使わないけど捨てられないものがあるでしょう。それがこんだけ広いから…。

Ｓ氏：だから私が(水害を受けるような)ここでこんなことやってるのは、１つには人間が人間であるためには１つは食べるっていうことでしょう。食べ物は農地からできるでしょう。農

地が放棄されてる。もう１つは人間が考える、学ぶっていうことでしょう。考えたり学ぶっていうことは学校がその象徴、ここですよね。学校も放棄されてるでしょう。日本全国。ここがたまたま田んぼが放棄されてる、学校も放棄されてる。放棄されてる学校と農地とを結び付けてっていうか、若い人たちに何か考えてもらいたいなと思って、それでこんなことやってるんだけどね。

（後略）

〈U・Iターンの意義や課題〉

質問：昔と今のU・Iターン者の動きの相違点は何ですか？

S氏：だから今はそういう意味では第三世代に入ってきてるんですね。最近入って来た人、例えば自分は十数年前に入ってきた。今入って来てる人たちはまた違うよね。

S氏：何が一番違うかと言うと、われわれは15年前後前、一番世代は30年ぐらい前でしょう、で、15年ぐらいして入って来て、何が違うかって言うとものの考え方で言えばほんとに自分のことだけを考えていく。われわれの世代はまだちょっと地域のこととか自分がここに住むわけだから周りのこともちょっと意識の中にあったんですよ。地域の人とどうやってなじんだらいいのかなみたいな、そういう苦労がすごくあったんでしょうね。

でも今ポッと来てる人たちは、もう俺たちの世界っていうのを非常に強く持ってる。それは悪いことじゃないと思ってるんだけどね。

質問：それは、第一世代が政治運動の流れでコミュニティ的に地方に入ってきて、摩擦も起こりやすい分、しっかり交渉もする。第二世代は個々人で地方に入ってきて、個々に地元とやりとりをする。第三世代はむしろU・Iターン者が直接地元とやりとりをするのではなく行政が支援する、という理解で良いですか？

S氏：そうね。例えば私がここに来たときはほとんど熊川町でいえばＩターン、よそ者なんて１人か２人だったですね。だからどこ行っても、何だ、お前らかって言って十把一絡げで見られたんですよね。

質問：新参者のようにですか？

S氏：明らかに石もぶつけないけどもかかわりもしない、そういうスタンスだったですよね、地元の人たちは。腫れものに触るというか。触ったらあかんみたいな。

こっちとしたらがむしゃらでも何かなじまなきゃいけないなみたいな気持ちはあったんですよね。だからそこでのいろんな行き違いはあったけど、今は行政がなまじどうですか？みたいなことをしてるでしょう。お金も出しますよって。やるから逆におかしなことが起き始めてるのね、逆に。われわれの時代はまだ自分だけだったでしょう。自分だけっていうか行政は全然ノータッチやから。

質問：当時は個人間の信頼で何とかしていたということですか？

S氏：うん。今は行政がなまじからんでるから。

質問：苦情も行政に行き、動くお金も税金ですね。

S氏：だから今の流れは危険な流れでもあるんだよね。都会が田舎にずかずか入り始めたってね。15年前は個人的にこそこそ。今は国という税金というものを背負いながら。

質問：これまで地方を見捨てていた政府が、今度は地方を巻き込もうとしているものの、その巻き込みの論理が都会のシステムに地方を組み込もうとするやり方にみえます。

S氏：だから恐らくこれからは田舎が荒れてくるよね。荒れ方が変わってくる。今までは人がいないから荒れてたんだけど、でもそれはその

もの自体が荒れてるわけじゃないよね。

質問：立ち枯れに近いですか？

S氏：うん。これからは外からの意識が、お金というものが入って来てるから速度が違う、荒れ方が。よくなるのも早いだろうけどよくなることはまずないと思うね、税金を使ってよくなることは。今までの例から言ってね。

それの一番いい例が地域おこし協力隊ですよね。

S氏：（こちらにも）入ったけど。だから制度自体は決して間違ってないと思うんですよね。

S氏：でもその制度を使う行政の人間、あるいは現場の人間がまったく今までと同じやり方をやってるんですよね。どういうやり方かっていうと必ず中間支援をするんですよ。行政が直接やるケースか中間支援を使うか。そうすると行政は何をしていいからわからないからでたらめなことをしますよね、現場のことがわかんないから。

中間支援は結局自分のこと、利益のためにやるんですよね。現場のためにやりませんよね。中間でそうやって抜いて自分たちが。だからぐじゃぐじゃになる。

質問：地域おこし協力隊の任期が過ぎたら、その後どうするんだっていう話がすごくあります。

S氏：だからみんな帰って来ますよね、ほとんど帰って来る。だから３年間金やるからここに来いっていう話ですよ。３年たったら勝手にせよっていう話でしょう。３年で何かができるわけないんですよ。

S氏：やっとね、だっーと慣れたぐらい。で、ポッと。お金があるから来たわけだから、雇用があるから来たわけだから、雇用がなくなったらどうするんだっていう話ですよね。

われわれのときはまだ雇用なんてないわけですよ。だから雇用がないことを前提として、だから自分で何とかせなあかんというそういう意識があったけど、今は行政がいろんな制度が、いろんなものがあるからそれを組み立ててというお金が中心としたものになりつつあるんですよ。だから地方が荒れるっていうのは都会の荒れ方が田舎にただ来て場所が変わるだけで。

S氏：だから制度自体はいいんだけども、それをうまく…、それは協力隊に限らずいろんな制度自体は悪くないと思うんですよ。

質問：悪意があるわけでもなく、アイデアにも見るべきものはありますね。

S氏：それを使いこなせる現場に育ってないから、結局お金だけになってしまうんですよね。

質問：極端に言えば行政の人手不足であるように思います。

S氏：そうですよね。質の問題ですよ。

（中略）

質問：こちらで地域おこしとか来られたら、大体農業されて３年間して出て行かれちゃうみたいな感じですか？

S氏：地域おこし協力隊はAがやったんですね。

質問：彼ってもともと東京で勤めてたんですよね？

S氏：いやいや、彼は大学３年のときにここに来たんだよね。

（中略）

S氏：で、大学時代に地域おこしとかっていうことを、今から７、８年前か。で、彼は和歌山だから和歌山県でどっかないかって言ってたまたまここに来て、学生時代に来て、それでまた長期休みのときに行ったり来たりしてて、彼一橋で大学院に行ったんですよね。で、院に行って１年休学して１年ここにいたんですよ。それで帰って卒業して新卒でドクターに行くかいろいろ迷ったんですね、それは当然ですよね。それで新卒でまたここに来たんですよ。

質問：最初から地域おこしで来たんですね。

S氏：それで４月に来て９月に台風になって。

質問：それが2011年。

S氏：うん。それでたまたま九重の今言ったの取り壊すっていうから、それはそんなことやって若い人たちが何か使ったらいいじゃないかっていうことであそこ全部Aがやるようになったんです。

(中略)

質問：結構でもＡ君の周りはわりと若手のガッツある感じの人が集まってますよね。

S氏：だからＡとかＢは。

質問：Ｂさんは新宮の市議会議員ですね。彼の地元はどちらですか？

S氏：大阪ですね。

S氏：彼は京大で。

S氏：あれは新卒で来たんですよね。

S氏：学生時代からここに出入りしてて、それで新卒で就職しないでここに来て。それでＢは２年ぐらいプラプラしてたかな。たまたま議員選挙があるからって出て。

S氏：Ａはあそこに廃校があるからって出て。そんな感じでね。だから彼らは雇用があったから来たんじゃないんですよね。

質問：自分で主体的にここを見つけたっていう感じですかね。

S氏：そうですね、入って来てるうちに地元の情報とかいうのができて、それを生かして定住してきた。

質問：(執筆者である半澤と共通の知り合いである)Ｃさんもそうかと思いますが、彼女が住むＥ(地域名)のほうって交流ありますか？

S氏：Ｅはそれこそ第一世代の、年齢的に一緒やからよく話はしてた。Ｆさんっていう一番最初のきっかけをつくった兄弟がいるんだけど、その人なんかとはよくあれで、私がずっと後からだったのね。Ｆさんなんかともよく話したんだけど、今まで子育てに忙しくてあんまり外にも出れなかったから、これからじゃあ一緒にやろうやみたいな話で、Ｅとこの辺地域でいろいろまとまってやったらいいですよねなんていう話をしてたんだけどなくなっちゃったからね、話が。

質問：自分で移住地を見付けて来た人は、定住し続けることが多いように思いますが、お仕着せの制度頼みで移住してくると、その制度がなくなると去って行ってしまいやすくなるのでしょうね。たとえ制度を頼みに移住してきたのであっても、自分から地元で縁を作っていけば、制度がなくなった後でも残れるようになるのでしょうけど、現実的には制度頼みで来ると覚悟が弱くなってしまいますかね？

S氏：結局そういう頼るものがないと自分を頼りにせざるを得ないっていうか、自分で何とかせなあかんなっていう思いがいつもあるでしょう。制度があるとそっちに頼りますよね。

S氏：そうすると自分の中に何とかせなあかんなという思いがあれば周りが多少変わっても制度がなくなっても、自分で何とかせなあかんなっていう気持ちのほうが勝ってれば何とかなるんですけどね。

Ｃさんなんかは来たころから知ってたけど、俺はいつも言ってたんだけどＥに浸かるなよって言ってたんだけど。

S氏：Ｅにされたらろくなことねえぞって。

S氏：せっかくあれだけ志を持って問題意識を持って勉強もして来たわけですよね。そしたらどっかに足を地につけるということは大事だけども、そこにどっぷり浸かり過ぎる、Ｅという地域性があるでしょうね。あそこに足をつけたら、もう外に出れないんですよ。Ｅというところは。なぜかと言うと地理的なこともあるけれども、あそこのＩターンの人たちの共通の最初からの認識はＥのためにやるということなんで

す。Ｅのためなんですよ。勝浦町は関係ないんですよ。新宮市は関係ないんですよ。

質問：まして日本が社会がなんて話ではないんですね。

Ｓ氏：全然関係ないんですよ、Ｅなんですよ。

Ｓ氏：Ｅを守っていこうって。だからそれに染まったらつまんない生き方になるぞって言ってたんだけどね。

Ｓ氏：あそこでやったら周りが見えなくなるんですよ。

Ｓ氏：何年か、10年か20年たって子育てが終わって、またパッと開いてくれればそれはいいなと思うんだけど、それはなかなか日ごろから鍛えていかないと育たない能力やから。子育てが終わりましたからじゃあ何かやろうかって言ったってそこまでの準備がしてなかったら行けないですよね。してはいるんだろうと思うけど。だからよく言ってたの、Ｅに染まったらあかんぞって。

Ｓ氏：それはＡにも言えることなんですよ。Ｂにも言えることなんですよね。だからここに染まるなよって。こんなつまんないところに染まるなよっていつも言ってるんだけどね。

質問：難しいのは、そのように地元に根を張った人がむしろ東京とか中央とネットワークを持つ方が良いのでしょうが、大体は地方に根を張った人は中央に向かなくなって、中央にいる人はさまざまな事情から地方に手を出す、口を出すという関わり方をするために、何かいろいろズレてしまうことではないかと思います。

Ｓ氏：ミスマッチが起きるんですよね。だからここに根を下ろしていいけども、意識だけはいつも外に、風通しはよくしておけよって言うんですよ。だから自分なんかもそうなんだけど、必ず年に何回かは東京行ったり大阪行ったりして、別に用事があるわけじゃないけどこじつけて行って、やっぱり東京の風に当たってこないと、ここに２年、３年いたらここの常識だけが自分を支配していくんですよね。

Ｓ氏：ここのことがわかった上で全体のことを意識してバランスを取っていかないと。ただ、俺はこう思うんや、だからいいんやっていう非常に狭いものに。いつの間にか隣のことは知らんぞみたいな我田引水になってくるわね。で、地域のことも知らん、俺はもうこれでやっていくんだからって。

何ができるわけじゃないけど意識だけは持っておかないといざというときにポッと動けない。

Ａもだんだん固まってきちゃってるんだよね。

（中略）

Ｓ氏：（Ａ氏の結婚相手について）やっぱりここでの出会いでね。彼女もここに何回も来てて、たまたま結婚して。それはそれでいいことなんだけど30（歳）の壁があるからとは言ってるんだけども。

Ｓ氏：結局20代のころはすごく可能性があるから、自分のやりたいことっていうのが中心に動いていけるじゃないですか。30になるともう30だからっていう、俺ももう30だから…。

Ｓ氏：周りも20代だから許してくれることが、お前もう30だろうって。

質問：周りから、フラフラするな、同級生は結婚もして家庭を持っているぞと言われたりしますね。

Ｓ氏：その大きな壁があるでしょう。それをどうやって突き抜けるか。突き抜けたらまだ自分がやりたいことというか自分の思いを中心にして生きていけるんでしょうね。それが40になるともっと厚い壁ですよ。お前もう40だぞって。今さらお前そんな恥ずかしくてよくやってるなみたいな話になってくるわけですよね。で、50になると今度は体力的なね。60になるとまた…、

その壁があるんですよ。

30の壁っていうのはみんなもこれから迎えるんだろうけど、自分の思いを大事にするのか社会の常識に合わせるのかっていうことでその綱引きがあるでしょう、自分の中で。だからほんとは俺歌唄ってたいんだけど、でも生活のためにどっかに勤めるとか、絵を描きたいんだけどってあるでしょう。

S氏：AとかBもちょうど年頃になったからね。つぶれていく農家を突き抜けていく分かれ目ですよね。

(中略)

S氏：だから地元のことを知った上で、それに流されないようにしないと。

質問：現在30代の人間の親世代(団塊の世代から少し若いぐらい)だと、就職や進学などで地方から都会に出ていったとしても、都会で行き詰まりを覚えた時に、最後に逃げたり帰れたりする場所として心の中では故郷があったように思います。けれども、個人的には、東京などの都会出身者だと、そのように地域を移動してIターンのように逃げるには最初にハードルがあって、自然に帰れる場所がない感覚があります。

S氏：それを今つくろうとしてるんですよね。ここはそういう機能を果たしてるんですよね、自分の意識の中で。だからスラムをつくろうと思ってるんですよね。要するに命があれば生きて行ける、仕事がなくても。命があって食べるものがあって寝るところがあれば生きて行ける。だから死ぬことはないよ。それでまたよみがえったらまたどっか行ったらいいわけで。

どこの国行ってもスラムって必ずあるんですよね。それはいろんなことはあるけども、そこに行けば生きて行けるっていうね、そういう場所を今つくろうと思って。

(中略)

S氏：これから若い人の生き方で、東京に行きたい人は東京に行ったらいいと思うんですよね。行きたいときに行きたいだけ。田舎に行きたくなったら田舎に来ていたいだけいて、また東京に行きたくなったら行けばいい。もうちょっと住む場所というのがゆるやかでもいいと思う。そうしたら生き方がそれだけゆるやかになってきますよね。

1回就職したらずっとそこにしがみついて、これを離したらもう生きて行けないみたいじゃなくて。

(中略)

S氏：私は15年間ここでいろんな大学生を受け入れして、東大、京大、一橋、早稲田、慶応が来る。偏差値でいえば上位のが来る。そうでないいろいろ来るんですよ。見てて思うことは、教育の話になってちょっと脇に逸れるけど、勘違いしてるんだよね。こいつら自分が優秀だと思ってる。こちらの人たちは俺ダメだと思ってる。優秀でもあるしダメでもあるし、でも自分の中にそれは両方あるもんでしょう。これは俺は、ここは俺はもうダメだなっていう。それで葛藤の中で何くそと思ったり、よしやるぞと思ったりして力が出てくるんですよ。

でも俺はもう優秀だと思っちゃうとアホになるんですよね。逆に俺はもうダメだと思っちゃうとダメになっちゃうんですよね。

質問：そうですね。どっちも共通してるのは価値観が単線なんですよね、複線じゃなくて。

S氏：だから偏差値っていうので、それを一番大事な価値観みたいな、自分にとって一番大事なことだみたいに過大評価してる。だから勘違いしてるのかなっていうのはいつももったいないなと思って、そうじゃないぞって。

だから優秀な人にも、お前優秀じゃねえぞって。それは受験勉強はしたかもしれないけども。

S氏：だからもうちょっとゆるやかに若いとき

はいろんなことを考えたらいいと思うのね。可能性があるわけだから。受験勉強があまりにも肥大化し過ぎてきてますね。

質問：意外に大学受験で失敗したけど大学生活は楽しいと感じた学生の方が、失敗してもそんなに大した問題じゃないと思えるのか、就活の時に落とされてもあまり落ち込まない気もしますね。

Ｓ氏：就活っていうシステムがある。つまり過酷だよね。

質問：誰でもそうでしょうが、就活で落とされることは自分を否定されることを意味するので、20～30回と重なれば嫌になるでしょうね。

Ｓ氏：例えば受験だったらまだ点数っていうわかってるもの。

Ｓ氏:俺勉強しなかったからなってわかるけど。

Ｓ氏：それはもう１回ぐらい(就活で落ちたら)だったら、まあそんなこともあるかって思えるけど、20回ね。

Ｓ氏：やっぱり俺ダメなのかなって。

Ｓ氏：そうするとせっかくの若いエネルギーの芽をそいでいってしまうでしょう。

　リクルートという会社があの仕組みをつくっちゃったからね。あそこのおかげだね。

　昔だったら大学に貼り紙があって。

(中略)

質問：あれはあれである意味自己否定をしないっていう意味では矛盾するようですけどよかったのかも知れません。いい大学にはいい求人が、中間の大学には中間の求人が。でもその代わりそこに応募すればそこまで落ちなくて自分のポジションが得られる。そうすると健全な自信が維持できる。価値観は単線になるかもですけど。

　やっぱりさっき言ったことと矛盾するようですけど、難しいなと思うのは、価値観の複線化と一方で自信を一定持つっていうことが調和するって結構難しいですね。

Ｓ氏：ただ、人と違うっていうことをもっと子どものときから人と違ってもいいんだと、みんながっていうように何でも横並びで、だからお前ら勝手にやれっていう。

質問：そこで畑作ですか？

Ｓ氏：勝手にやっていいんだぞっていう、今学校つくろうかなんていう話になってるんだけど。

質問：ここを再利用みたいな感じですか？

Ｓ氏：小学校をね。小学校というか今のフリースクールっていうのは不登校の受け皿みたいなものじゃなくて、もう勝手に生きようよ、生きようぜみたいな。

Ｓ氏：(戸塚ヨットスクールなどは)極端だからね。もっとゆるやかに。だから学校行きたいっていうときは学校行ったらいいし、行きたくないときはこっち来たらいいっていう。だからこっちがよくてこっちがどうじゃなくて、○か×かじゃなくてね、もっと広くいろんなことがあっていいような。

　だから小学校入ったら出席日数があと30日欠席したら不登校になるとか、そんなことじゃなくて半分ぐらい行ったらいいのかな。

(中略)

Ｓ氏：もうちょっとだから考え方を、頭を揺すらなきゃいけないよね。１つの価値観じゃなくて。いい加減に生きてもいいじゃないかと。いい加減というと何か悪いことのようにすぐ思うけど、そうじゃなくて。

(中略)

Ｓ氏：だから(移住してきた親世代の子供たちがEに)残んなくてもいいと思うんだけどね。もっと出入りが自由になったらいいけども。

Ｓ氏：合う合わないがあるからね。ＥはＥの人間で･･･。何か非常に閉鎖的な強烈なのがあそこの伝統だね。ここら辺の人たちはああいうの

が嫌なんですよ。

S氏：Ｉターン者嫌で。

S氏：だからその辺はもうまとまらないの。

質問：では、ＥはＩターン者、Ｕターン者同士の交流強そうですが、こちらではそこまでないんですね。

S氏：みんなが我こそはと思うようなのは来ないんですよ。

S氏：けんかはしないけども、じゃあＥは寄ると触るとみんなで一緒にやろうと一緒にやる。そういうグループがいくつかあるんでしょうね。で、毎晩、今日はこっちの、明日はこっちって会合があるんですよね。そういういつも誰かがつながっていることが喜びの人たちがあそこにいるんです。そうじゃなくて俺は俺でやるんだっていう人たちはこの辺の特徴ですよね。

S氏:だから俺もそうってみんな思ってるから。

質問：Ｅが最初にＩターン者を受け入れた地域であり、Ｅにそういう人がかたまったのを見て、そこは嫌だからという理由で、この周辺に移住者が来たという流れだったのでしょうか。

S氏：やっぱりここの地域性もあると思うんだよね。Ｅっていうのはもともと落人と言われてるぐらいで(地理的にも隔離されている)。

S氏：あそこ入ったらもう出れないという。

S氏：この辺はわりあい川があったりして熊野古道もあるし。

S氏：少しは風通しがないとは言いながらあるんですよね。それでこの辺の人でもいわゆる地元の人でも生まれ育った人というのは少ないですよ。山の上からこの辺の人たちが新宮に行って、より大きな地域の人達がここに下りて来る。

S氏：そういうわりあい移動するんですよね。

質問：そうすると歴史的にあんまり自分の土地への執着が薄そうだからよそ者が入って来てもわりと…。

S氏：われわれがダーッと入って来たかみたいな。でも私たちはみたいな。話を聞いたらその人も若いころ来たみたいなね。

(後略)

◆　U氏へのインタビュー

〈カヌー体験事業を始める経緯とその現状〉

U氏：はじめまして、古座川アドベンチャークラブのＵといいます。よろしくお願いします。

U氏：出身は古座川町三尾川というところで平井からここに来る途中にある集落です。(中略)子どものときは田舎が大嫌いで、昭和34年３月８日生まれで、だから皆さんのお父さんと同じ年か、お父さんよりもちょっと上ぐらいの年代です。だからすごい高度成長期で東京オリンピックもあったり万博もあったりということで、ご存知のように過疎が急激に進む、そういう時代に田舎で生まれました。

子どものときからそういう過疎なので、都会に行った親戚の人とか知り合いとかが正月とかお盆に帰って来ると一張羅を着て帰って来るわけです。それで帰って来て村の人みんながすごい、すごいって言う。よそに行った人がすごいという、そういうふうなイメージを持ってしまったんです。それは一般的に全国区で同じようなことだと思います。

それで自分もやっぱり古座川を出てサラリーマンを35歳までやってて、子どものことでこっちに帰って来ることになったんやけど、それは漏斗胸といってちょっと気管が細い、生まれ持って。だから無呼吸症候群だったりとかっていう、そういうような危険性があるということで和歌山市内だったり大阪でサラリーマンの仕事をしてたんだけどこっちに帰って来ることになって、いざ子どもを田舎で育ててっていうことになって、やっと古座川はいいとこやなとすごく思って。

それでいろいろ仕事を、バイトをやったり。

35なんでそうそう仕事もなくてバイトをやりながらでしたけれども、当然家族を養っていくっていうことについては父親としてはお金を儲けてくるっていうのが絶対なんですけど、それよりも親の仕事って一体何だろうって思ったら、子どもを無事に社会人にするっていうことで、お金を儲けてきて教育を施してっていうことだけではないと。

それで漏斗胸でちょっとぜんそくぎみだった子どもを仕事もせずに山へ連れて行ったりキャンプに連れて行ったり海に連れて行ったりやってたんですよ。

おかげでうちの息子、今大学生なんですが、大分ガタイもでかくなったし合気道の初段を取って教えているんですけどっていうようになってきて、少し、もう一歩手前、社会人として自立する一歩手前までやっときたっていう。だから親としての成長と子どもの成長と一緒に歩んできたなっていう感じなんですよ。

その中で子どもの成長だったり自分の成長だったりっていうのを何かしら残せないかなっていうことで、カヌーなら人よりはちょっぴりだけできたので、これをちょっと商売にしてみようと。

昔からよく言われるのが、こういう地域づくりをやっていくとか、経済学も含め活性化をしていくっていうときに、誇りを持ってその地域に住むっていうか、そういうことがよく言われていると。

で、喜びと誇りを持ってすごい自然が豊かなところなんだっていうのは誰もが古座川町に住む人は言います。資源は豊富にある。でも資源って一体何ですか？っていうこと。資源というのを明確にとらえないとそれを有効に利用できないし守っていくこともできないし、それを自分の誇りとも思えないし喜びとも思えない。ただ漠然と空気がきれい、すごい森がいっぱいあっていいっていうそれだけではちょっと世間とは戦えない。いわゆる世間とは一体何なんだって言ったら経済ですよね？経済活動をどうすればいいのか。

その中で今言ったように子どもとともに成長してきた、学んできたことをアドベンチャークラブとして展開していこうと。

当初は観光事業の要素が多かったです。だからどういうふうにすればお客さんが来るかな？とか、そういうことばっかり考えてて。ただ、でも勉強する、35からの再スタートだったんで、心理学だったりとかカヌーの技術を磨くために北海道に通ったりとか、山もやりました。

古座川ではこれという観光事業はなかったです。ガイドというふうなことは。インストラクターとかっていうのはなくて。だから僕のガイド論というのはオーストラリアの国立公園で使われているガイド論っていうのを勉強しました。

それで勉強していた中で、古座川ってやっぱりすごい資源がある。だからその資源っていうのは教育の根っこになる、人づくりの根っこになる観光事業だろうというふうに思って今その形をやっています。

だからちょっとチャラついた古座川アドベンチャークラブということなんですけど、要は古座川でひとりひとり僕とかかわった人がひとりひとり自分の人生なりちょっと萎えかけた気持ちだったりっていうところに再チャレンジをしていくための１つのワンステップをやってもらいたい、一緒にやりたいというので古座川アドベンチャークラブっていう、だからこの事業自身も古座川ではアドベンチャーなんですよ、チャレンジャーなんです。だから何もないところで。だから非常に非難されました。で、馬鹿にもされました。

最初スタートしたときは船３艇でスタートし

て、仲間の支援もあったりで、今やっとこさ大体ワンバス45人は１回でこなせるようになったし、もう今年で４年目になるけど韓国の日本でいう国立大学の先生がやってる塾があって、各州っていうか行政区域単位で塾を開いてて、それでもやっぱり韓国は水はあるんですけど水辺と触れ合うというのがなかなかないらしい、森を歩いたりとか。それとやっぱり韓国は競争社会で、でも経済的には空洞化してて、頑張って頑張って勉強してやっても、いわゆるいいところに就職できないとか、一握りの人たちだけということで、どういうふうにしていけばいいのかっていう、そういうことで精神的なことだったりとか、そういうような事業をおこしていこうということで塾をやっていて、そこが年に２回50人程度うちに視察ということで来てくれるようになりました。

それのほかには障害者スポーツ、ここにも載っかってますけど、障害者カヌー、日本障害者カヌー協会というのがあって和歌山にも支部があります。そこで障害者の方々を、それもチャレンジなんですけど、いわゆる車いすだったり生まれもっての脳障害だったりとか、いろんな人、精神的に病んでる人も含め、カヌーに来てちょっと違うところに行ってみることで気持ちが変わったりとかするよという。

こういうのを転地療法と言ったりとか、これはドイツが有名ですよね。うちはそれも勉強して。ですので水辺にいざなったりトレッキングをしたりっていうこともそういうのを使ってやってます。

（中略）

U氏：それってざくっと、なぜこういうふうなものをここでやろうと思ったか。今、カヌーとか森を使ってそれを資源として自分の中で得た感触でもってそれを商品化していって、で、どこをターゲットにして売っていくかっていうのは、当然皆さんも勉強してはるんで観光ということの中のどの要素に向かって売っていくかっていう、その中では僕は教育と精神的なもののカバーをする。そのためにこのエリアがあってこういう資源がある、こういう交流をしていくというふうな観光という、みんなはそれなりの要素を持って観光事業というのはあると思うんですけど僕はそこに焦点を当てて露骨にやっていくという姿勢で今までやってきましたね。

というふうなことです。

（後略）

〈他地域との繋がりや人脈の広げ方〉

U氏：土方もやります。地籍調査事業っていって全国でやっている、地界ってわかるかな？土地の境界、それを今全国でずっと調べてる。その中のこの紀南の本宮と串本に入札をしていただければ、お仕事なんです。

質問：テレビのお仕事とかイベントのお仕事とかって前職と関係あるんですか？

U氏：まったくないです。

何でそういうふうな道に足を踏み入れたかっていうと、今はそうじゃないですけど昔はやっぱりお金がたらふくあるときは行政が、イベントをやりますとかタレントさんを呼びますとかっていうと100万、200万ポンと出したんですよ。言うたら1,000万とか。で、全部江戸の人だったりとか都会の人に持って逃げられるわけですよ。で、ああ疲れた、疲れた、ああ楽しかった、何か音楽よかったねとかっていうだけなんですよ、残るものは。

そのお手伝いに行ったときによくしてくれたディレクターさんがいてて、ちょっと手伝いに来ない？っていう話で。だから38でADをやってるっていうのは俺ぐらいなもんでしたね（笑）。普通だったら20歳とか22とか、それで４～５年やってディレクターになってっていう。

だから遅く入ったんで。

ありがたいことに田舎にいてて東京で仕事して田舎に帰って来て閑散期、するんで結構やっぱりずるずるべったりここにいると自分も刺激がない。行って帰って来ると違うものが見えたり。

東京にいてて仕事をしてるとまたこっちの違う面を思い出したりとか感じたりとか。それは非常に有効でしたね。

（中略）

U氏：だからいろんな世界を35を過ぎてから見てきたんでラッキーでしたね。人の出会いっていうのは大きいですよ。

（中略）

U氏：そこ（Ｔ大学の臨床心理学が実施しているフリーキャンプ）の子どもたちが、小学校６年の子どもたちが交通学を勉強してるときに修学旅行としてうちに来てくれたんですよ、３泊４日。

（中略）

U氏：（修学旅行に関して）僕がプランをつくって、教育プランに近い、教育プランに沿ったかっこうでこの古座川の環境で夏場できるようなことをやりましょうということで、それがいまだに結構続いてて、そのときに小学校６年で来た子が今うちのスタッフです。

一昨年から大学に入って、今年で４回になるんですけど去年１年休学して、彼女も自分探しの旅に１年間出て、沖縄から連絡があって１ヶ月、２ヶ月腰据えて手伝いたいと。いろんなところ回ってきたんやけどっていうことで来てくれて。

で、もうじきまた４月から来ます。その子の後輩が今度古座川に定住します。20歳です。明日Ｔ（大学）でミッションして15日から、15日ミッションしてその帰りに、この子らの友だち３人連れてここに来てここでまた寝泊まりしながら毎晩いろんな議論してどうだこうだ。その子らに今言ってるのが、やりたいことを酒飲みながら常に話するんです。僕はそれについてさっき言ってたけどこうと違う？とか。でもねって言いながら。で、最終企画を書いてもらって、その企画はどこへ向かっての企画かっていうと助成金を取れるような企画です。自分たちで。

だからやりたいことがあったらばやっぱりやる。やりたいことのために何をやるか。何をやるかを項目立てて、まずはスタートはお金。そうしたら助成金を取る。助成金を取るにはどんなところがあるか。それを調べてみようや。その中で助成金をもらいやすいところを整理して、そこは何を狙っているのか、待っているのかっていうのをまたやって、そこに向けて自分たちの巨大なテーマの１つを企画として書き込む。それで取っていくというふうにしてやってます。

（中略）

U氏：北海道から九州まで行って、その町で先生が講演した後、地域の若い人とかと塾をつくりませんか？っていう説得をしたり。おかげでいろんな町でカヌーはただでさせてもらったんで、日本で、世界でって言ってもいいぐらい冒険家でカヌーイストでっていうシイナアキオさんっていう人がニセコにいるんですけど、その方ともその旅で知り合っていまだにお付き合いをしてます。

前にご一緒にシンポジウム出させていただいたときの、あのときのメインゲストって三浦雄一郎さん。あの人ともその人を介して友だちになりました。知り合いになった。

それで、まずはうちのスタッフというか仲間で、これをやりたいっていう人にはやっぱり助成金を取って。

U氏：お金を取りにいくっていう。そこで自分

の企画をやっぱり書く。自分自身の企画を持つ。だからやっぱりいろんなところのカヌーのとかアウトドアのツアーとかっていうのも見させていただきました。それもやっぱり勉強になった。

〈初期の周囲の態度〉

U氏：（前略）（スーパー）オークワで買い物をしたときに、向こうのレジで精算してる人が大きな声で「あー、お前また遊んどんのんか、俺は仕事しとんのによー」とかね。「ええのー、川で遊んで」って。

カヌーとかいうのはここの辺の人にとっては遊びなんですよ、川遊び。だから仕事としては見てくれてない。っていうのがちょっとやっぱりしんどかったな。

子どもは今でも言いますけど、保育園、小学校へ行くと、最初のうちはやっぱり小学校のうち最初のうちはお父さん仕事何やってるの？お父さん何やってるの？　毎日聞かれたんですね。

でも、それも今っていうか、楽しいですよね。

それで家族の協力…、親戚とか今は何とか復旧しましたけど、父親といがみ合いというかね、35までまともに…、35までもあんまりまともじゃなかったけど、子どもも２人できて嫁もあって何を突然馬鹿なことをっていうふうな。ちゃんと仕事に就いてる、世間が認める仕事に就いてくれればいいのに、訳の分らんことしやがってっていう。

U氏：だから始めた当時はボロクソ言われて、正月とかお盆に実家に帰るんですけど、ここから父親の所にね、帰るんやけど、家の中に入れてもらえなくて、俺。で、嫁と子どもは家の中で寝させてもらえるんやけど、俺だけテント張って。

結構広い、地主っていうか土地持ちなんで。そこに端っこのほうにポンとテント張って、そこでいる間生活するんですよ。

で、夏は近所の人がお盆に来たりとかしてごあいさつに来たりお参りに来てくれたりすると、夏やったら「ああ、キャンプ好きなんやのう」。冬来たともやっとるやろ？よっぽど好きやねんって。「寒うないか？」って言うんやけどさ。「いや、いや」って言いながら。

スタッフ：彼は、僕客観的に言うたら10年、20年早いことやっとるからね。多分彼が始めたときっていうのは全国的にははしりなんやろうけども、古座川ではまず20年先や。だから今時代がひっついた（追いついた）という。

（後略）

〈後継者〉

U氏：でも、追いついてきたころに体力が落ちてきとるんで。だから今度来てくれると、彼らに僕は全部譲ろうと。人脈も。

（中略）

U氏：だから本当に有名無名にかかわらず、この人はいいよっていうのは次の世代に渡していって、機材も渡して、一緒に今度。僕が体力がなくなってきたんで。

今目標が熊野遊学っていうNPOをつくりたいっていうことを３年前からみんなに言っていて。

U氏：だから自由に遊んで自由に自分の中から目標を持って、その目標から勉強を始める。熊野で遊んで学ぼうという。だから遊んで学ぶターゲットは山、川、海、農業。で、農業って、業っていったら生業なんで遊ぶことはできないんだけど、言うたら農遊びをやってみようと。だから自然農法をやってみたい、今度来る子は自然農法やってみたい、不耕起農法やってみたい、傍からみたら遊びなんですよ、専門職からすると。いいよ、遊ぼうよ。そこから何か生まれると思うよ。

で、３年間月給21万5,000円出して、３年間これをして、今ちょっと中間なんですけど、夏場、去年は４人体制で。

（中略）

U氏：地元の若者ではなかなかないですね。

だから意外と今ある傾向っていうのは都会の人がこういった環境とかこういったところで働きたいっていう気持ちが強いです。で、田舎の人はやっぱり都会で働きたいっていう気持ちが強いように思いますね。

ただ、僕冒頭に言ったように僕のように田舎が嫌いだ、だから外に行こうっていうんじゃなくて、仕事がないから仕方なくで都会に行こうっていう。だから少し方向が逆転しましたね、若い人たちの。

だから出て行って、もう田舎なんてって言いながらでも出て行った若い人たちの中には仕事があればこっちに帰って来たいっていう子が多くなりました。俺のときなんていったらもう帰って来たいなんて「お前帰るん？」みたいな。「田舎に帰るってか？」「どうしたん？」みたいな。「田舎に帰って何すんの？お前」こんな時代。これが大きな世の中の転換期なんですよ、やっぱり。

だから僕らが目指してた経済だったりとかそういったものっていう目標にしてたものが、もうほんと180度これから、言うたらここまで振ってきた振り子がキュッと振り返しにかかった。この振り子がどんどんどんどん加速していってまたこういうふうにしていって、これを繰り返しながらスパイラルして時代が進んでいくって言われてるんで、今その振り返りのここなのね。

〈ブランド戦略〉

U氏：大阪にはもういくつものチームがあるんですけど、Ｙテレビの報道部のチームが毎年家族連れでやって来ます。それも最初３家族ぐらいだったやつが今いろり館を貸切で２泊３日で来たりとか。

質問：宣伝っていうのは。

U氏：やってません。

質問：それは口コミというかそういうところでじわーっと広がっていって今それだけのリピーターがある。

U氏：ええ。これはどうしてそうしたかって言うと、僕の知り合いで大成功して、今東京の億ションに住んでる人がいるんですよ。番組も持ってるし、ラジオ番組ですけど。で、彼がやっぱり同じように30回ってから嫁に苦労かけながら成功していったんですけど、始めたころすごい気にしてくれたり協力してくれたり。その中で言ったのは、ブランド化せんとあかんって。古座川はええとこなんやから、お前のそのカヌーがブランド化せんとあかんって。でも僕そのときブランド化なんてまったくどういうことなのかわからなかったんですよ。

（中略）

U氏：だからアピールするとほかにもお金を持ってるやつのほうがもっともっとアピール…。

金持ちはいっぱいおるし、金持ちじゃなかってもそういうふうな僕らの時代でパトロンってわかる？出資者、そういうのをうまく集めてくる人もおれば強敵は何ぼもいるわけですよ、全国で戦うと。で、全国区で戦わんとあかんので。和歌山県内だけで戦ってたら絶対あかんの。古座川町の中でいがみ合ってても あかん。一緒にカヌーやってるＪたち、新しく若い人たちやっているけど、傍から見てたらライバルやなって言われる。いや、違う、ライバルじゃないって。そこでライバルっていう意識を持つっていうよりほかのもっと力があってもっと成功してるところがあって、そこを見なあかん。っていうことになるとブランド化っていうのもなかなか難

しい。

どうでしょう。

質問：ジビエも古座川がブランド化しなきゃ。

U氏：でもジビエも同じように十津川では同じように十津川もハンバーグをつくってます。

でもイタリアの有名ブランドのかばんあったりとかさ。

質問：グッチ？

U氏：グッチとかバレンチノとか。グッチのコマーシャルなんて見たことないよね。あんまり。そやけどみんな、あーグッチって言うやん。それがブランドよな。それで買おう思うてもなかなか売ってへんや。高いし。何でやろうね。

グッチってそんな大きな工場持ってるの？っていったらそうじゃないよね？家内事業みたいな。でも世界で、すごい離れた日本でもグッチって、グッチ裕三(笑)。だからそれがブランドなんやけど。

で、俺が考えたのは、コマーシャルしない、広告しない、宣伝をしない、なるべく自分の地域では。

で、最近よくあるクレームなんですけど、古座川アドベンチャークラブの連絡先とかそういうのをもうちょっとアピールしてくれと。ここまで来るのにどんだけ探したか。それは友だちの友だちが古座川ってすごく川きれいらしいぜ、夏行ってすごい楽しかったらしいわ。そこでカヌーやってんって。あっそう、だから古座川・カヌーで検索したらたいていヒットするのはKさん。で、電話をします。電話して、いや、こうこうで、あれ？　聞いた話とちょっと違うぞ。で、いや、ガイドはついててどうのこうの…。それはUさんっていうところですね。ああそうですか。電話番号。そしたらL(施設名)に電話かかってきたの。Lに電話かかってきて、Lの職員が「Uさん、また電話かかってきてUさんとこの電話番号言うといたで。うちへかからんように言うてやってよ。俺らも忙しいんやから」って言われて、その人も嫌な対応を受けたんやろうね、ここへ来てPRっていうかちゃんと出してくれなんなら困る。で、るるぶさんが協力してくれて、るるぶさんは今年のやつっていうことになると毎年ただで載せてくれるんです。

で、るるぶさんに恩返しをする意味で載せてくれ始めたころに本を持って来たらディスカウントします。1人1,000円。僕は1人1,000のディスカウントをしてたんです、最初。やっぱり傾向として夏が終わってからるるぶの使ってる。

っていうのは、夏場本番は沖縄行ったりとか北海道行ったりとかたいてい遊びつくして、あとどこ行こうってるるぶを見てみんなメインから次っていったときに俺のところが目につく。だから本の中に、この本を持って行ったらば1,000円安くなるんだよっていう。

俺、最初は1人ずつ1,000円ディスカウントしてたらるるぶさんから「安くしすぎ」って怒られて、1組1,000円。そしたらお客さんが本の値段と変わらへんな。1冊買ったらU君のところ行ったら1冊がペイになる。

そこで毎回同じ本を持って来たら困るんで、友だち同士でたらい回しされたらつらいんやわね。やっぱりるるぶさんに申し訳ないやんか。だからそのときにピッて見せてもらってそこのところにマジックでピッとはねさせてもらって。

だから今半ばうちのスタッフがいるのに何でもかんでも僕が背負い過ぎてるんで、仕事を分散してせなんだらだめですって言われるんやけど、だいぶ育ってきてくれたんで、スタッフが。だから多人数を受けることもできるし、今度はそのスタッフを食わしていかなあかんので、ちょっと広報もしていこうかなと思いますけど、戦略としては今はそういうふうにしてやっ

てます。

　だからブランドというところまではまだいってませんが、なかなか手に入らんものっていうのをやっぱり大事にして。

U氏：で、何が怖いってアウトドアに限らずですけどクレームが怖いです。リスクマネージメント、こっち側のリスクマネージメントとしてどういうお客さんに来てもらいたいか。でも向こうはそんな選ばす機会ってないでしょう？僕らに「あなたのために」とかそれ言わせてくれへんよね。そういう意味でやっぱり…。「もー、どんだけかかるんよー」って言っても、やっぱりそれだけ作業するとここに来て僕の話よく聞いてくれるし、うちの息子に言ったことがあったんやけど、娘、息子が手伝ってくれてたときに。お客さんに会うたときに「ありがとうございます」っていうか「ありがとうございます」って言うか「ありがとうございます」って言うか「ありがとうございますっ」って言うか、どれが一番いい？　っていったらやっぱり一番最後に言ったやつがいいよねって。なぜそういうふうになるかって言ったら、おいらが東京へ、ディズニーランドへ行くときに１週間、いや１ヶ月、行くために準備をするじゃない。で、やっとこさ東京へ出てディズニーランド入りました。そこで「いらっしゃいませ」って言うんやったらガックシってなるやん。僕らも東京へ行ってよかったなって思うような迎え入れ方を僕らもせないかん。やっぱりそういうふうなこともあるので、そういったいろいろとあります。

スタッフ：宣伝しないのがブランド化の１つね。

U氏：そうですね。

（後略）

【注】

（1）たとえば、以下の記事を参照のこと。
http://www.asahi.co.jp/life/backnum/140712.html
http://www.town.kimino.wakayama.jp/kanko/cat80/
（2016年9月24日参照）

（2）検索は、「山のパン屋」というフレーズのほか、「山の中」、「田園の中」、「自然」などと「パン屋」、という単語の組み合わせにより行った。

（3）Ｓ氏は補助金、Ｕ氏は助成金と言っているため、厳密には違うものであるが、税金を原資とした公的補助という意味では共通である。

【参考文献】

サクセニアン, A. 著, 本山康之・星野岳穂監修, 酒井泰介訳（2008）：『最新・経済地理学：グローバル経済と地域の優位性』日経BP. Saxenian, A. (2006): *The new argonauts: regional advantage in a global economy*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

サクセニアン, A. 著, 山形浩生・柏木亮二訳（2009）：『現代の二都物語：なぜシリコンバレーは復活し、ボストン・ルート128は沈んだか』日経BP. Saxenian, A. (1994): *Regional advantage: culture and competition in Silicon Valley and Route 128*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

半澤誠司（2010）：文化産業の創造性を昂進する集積利益に関する一考察,『人文地理』62 (4): 20-39.

半澤誠司（2016）：『コンテンツ産業とイノベーション：テレビ・アニメ・ゲーム産業の集積』勁草書房.

Bathelt, H., Malmbelg, A. and Maskell, P. (2004): "Clusters and knowledge: local buzz, global pipelines and the progress of knowledge creation," *Progress in Human Geography,* 28-1:31-56.

Christopherson, S., Michie, J. and Tyler, P. (2010): "Regional resilience: theoretical and empirical perspectives," *Cambridge Journal of Regions, Economy and Society,* 3: 3-10.

Grabher, G.. (1993): "The weakness of strong ties; The lock-in of regional development in Ruhr area," In Grabher, G ed. *The embedded firm; On the socioeconomics of industrial networks,* London: Routledge: 255-277.

Hanzawa, S. (2014): "Do animation firms enhance the scope of business by using local resources? – Japanese animation industry in the 2000s," IGU2014 Regional Conference, Kraków.

Pike, A., Dawley, S. and Tomaney, J. (2010): "Resilienc, adaptation and adaptability," *Cambridge Journal of Regions, Economy and Society,* 3: 59-70.

Storper, M. and Venables, A. J. (2004): "Buzz: face-to-face contact and the urban economy," *Journal of Economic Geography,* 4(4):351-370.